

佐賀大学留学生センター自己点検報告書
—平成21年度—

平成22年9月

目 次

1. 目的・目標	1
2. 留学生センターの概要	3
3. 領域別の自己点検評価	6
(1) 教育の領域	6
ア 教育の目標・成果に関する事項	6
イ 教育内容・活動に関する事項	6
ウ 教育環境に関する事項	7
エ その他教育に関する事項	7
(2) 研究の領域	19
ア 教員及び教育支援者に関する事項	19
イ 選択的評価基準A 研究活動の状況に関する事項	20
ウ 平成21年度の留学生センター教員の研究状況	23
(3) 学生支援の領域	28
ア 教育に関する事項(留学生の修学/日本人学生の留学/留学生と日本人学生の交流等)	28
イ 生活に関する事項	31
(4) 国際交流・社会貢献の領域	37
ア 教員および学生の国際交流に関する事項	37
イ 教育および研究における社会連携・貢献に関する事項	41
(5) 組織運営の領域	44
ア 管理運営に関する事項	44
イ その他組織運営に関する事項	49
4. その他	52
(1) 平成20年度の外部評価	52
添付資料一覧	53

1 目標・目的

(1) 観点ごとの分析

基本的観点 1-1 留学生センターの目的（教育研究活動を行うに当たっての基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確にさだめられており、その内容が学校教育法に規定された大学一般に求められる目的に適合するものであること。

基本的観点 1-2 目的が大学の構成員に周知されているとともに、社会に公表されていること。

基本的観点 1-3 教育課程や教育方法などを検討する教務委員会などの組織が適切な構成となっているか。また、必要な回数の会議を開催し、実質的な検討が行われているか。

（観点到る状況）

留学生センターは教員数が少ないので学部の教務委員会に相当する組織はない。今年度からは、センター教員の中から教務主任を決め、教務主任のもと、日本語各レベルのコーディネーターを中心にカリキュラムや年次計画が作成されている。その結果は、まず教員会議で、その後留学生センター運営委員会で説明をし、審議・承認を得ている。

（分析結果とその根拠理由）

多くの場合、教務委員会がなくても担当コーディネーターを中心にしてスムーズに進むが、重要な課題は、担当コーディネーター及び教務主任を中心に前もって議論されなければならない。必要に応じて留学生センター運営委員会に諮る前に教員会議を開催し議論している。

(2) 優れた点及び改善を要する点

留学生センター運営委員会で審議され、決定されるので客観的な判断のもとでカリキュラムや年次計画が立案されている。

（改善を要する点）

教務委員会に代わるものがないため、今年度から新たに教務主任を設置した。これにより、カリキュラム全般を教務主任が把握できるようになったが、年次計画については、事前にセンター全教員との話し合いをもって作成する必要がある。

留学生センターの目標・目的

平成 21 年度の留学生センターの目標・目的は、中期計画／中期目標の年度計画に示されて

いる。すなわち：

1. 留学生のための日本語教育の改善と充実
 - (1) シラバスや、授業内容を見直し改善につとめる
 - (2) 図書や教材を充実させ、留学生のための勉学の環境を整える
2. 留学生のための修学指導の充実
3. 留学生のための生活相談支援の充実
 - (1) チューター制度の改善
 - (2) 宿舍の整備・充実
 - (3) 奨学金に関する情報の提供や申請の手続きの支援
4. 留学生と地域社会との交流の促進
 - (1) 地域の交流イベント情報の提供
5. 日本人学生のための海外留学支援の充実
 - (1) 海外語学研修を実施する
 - (2) 海外留学に関する援助や情報を提供する
 - (3) 留学生センター英語教育部門での海外留学のための英語教育を実施する
6. 教員による研究活動の促進
 - (1) 学会での発表や学会誌等への論文発表を促進する
 - (2) 外部からの研究費の獲得に努力する
7. 留学生センターの活動の情報を発信する
 - (1) ホームページの充実
 - (2) 英語版ホームページの充実
 - (3) 教員の研究活動をホームページに掲載する
8. 国際的交流を推進する
 - (1) 帰国留学生とのネットワークを構築する
9. 教員の授業および活動内容を評価するためのデータを収集する

「基本的観点1-1および1-2をふまえた自己点検評価」

留学生センターの目標・目的は、「留学生センター中期計画／中期目標」の年度計画に明確に示されている。また、その内容は、大学一般および佐賀大学での留学生のための教育及び修学指導に求められている目的に適合するものである。留学生センター中期計画／中期目標の作成にあたっては、センター教員全員で協議し決定している。「留学生センターの目標・目的が大学の構成員に周知されている」に関しては、「留学生センター中期計画／中期目標」をとおして周知されている。また、留学生センターの目標・目的が社会に公表されているかに関しては、留学生センターの刊行物やインターネット上で公表されている。留学生センターの情報提供には、ホームページは有効な手段であるが、更なる情報発信のためには、細部において改善の必要があると思われる。

2 留学生センターの概要

基本的観点2-1 佐賀大学での留学生への教育と修学指導が充分に行われてきたか、またその活動状況をチェックし、適宜修正していくなどの努力が払われてきたかどうか。また、留学生センターでの活動状況を佐賀大学内外に周知する努力をしてきたかどうか。

留学生センターは、勉学・研究する外国人留学生及び海外の大学に留学を希望する学生に、必要な日本語教育と指導助言及び留学の資料の提供、指導を行う教育・研究施設として、平成12年4月1日に設置された。設立当初は、センター教員は2名であったが、平成17年には7名に増員された。

留学生センターでは下記のような業務を行っている。

①日本語・日本事情教育

学部留学生を対象に、正規の授業科目として日本語と日本事情を開講している。日本事情の授業は、学部の教員により、それぞれの専門分野から見た日本事情について講義が行われている。

②大学院入学前予備教育（日本語研修コース）

主に国費留学生（研究留学生及び教員研修留学生）を対象に、大学院等への進学又は教育研修のために必要な日本語教育を6ヶ月間集中的に行っている。このコースは、4月と10月に開講される。

③日本語総合コース

大学院生、研究生、外国人研究者を対象とした日本語プログラムで、初級から上級まで新カリキュラムにて開講している。

④短期留学プログラム(SPACE)

佐賀大学と交流協定を締結している外国の大学から留学生を一年の期間で受け入れ、日本語・日本事情及び英語による専門科目を提供する全学的なプログラムである。留学生センターは日本語教育とそのコーディネートを担当している。

⑤留学生に対する修学上及び生活上の指導助言

本学で学ぶ留学生が修学・進学や日常生活の面で悩みを抱えたときに、適切な指導助言を与え、担当者のオフィスアワーの表示をおこなうなど、解決に向けたサポートを行う体制を整えている。

⑥海外留学を希望する学生に対する修学上及び生活上の指導助言

海外留学を希望する学生のために、留学に関する資料を提供するとともに、修学上及び生活上の指導助言を行う体制を整えている。また、オーストラリアとアメリカの交流締結校での短期（4週間～6週間程度）の海外語学研修も実施している。

⑦地域との留学生交流の推進

佐賀地域留学生交流推進協議会の幹事校となるなど、地域の国際交流団体やボランティア・グループとの連携を図り、留学生がより充実した留学を送れるようバックアップを行うとともに、学内外の国際交流を促進している。

⑧留学生と日本人学生との交流の促進

「国際学生シンポジウム」や年2回の「国内研修旅行」および、日本語の授業の一環として日本人学生を授業に招いて「ビジターセッション」を実施するなど、留学生と日本人学生との交流を促進している。

⑨留学生教育の調査研究

留学生の日本語教育を始め、留学生の受入・派遣に伴う問題や、入学後の問題等に関し、調査研究に取り組んでいる。

「基本的観点2-1をふまえた自己点検評価」

留学生センターでは、留学生の多様な教育的ニーズに応えるべく、新カリキュラムにおいて対応してきた。これにより柔軟な履修が可能となり履修者数も増加傾向にある。また、日本語コースの内容が留学生のニーズに合致しているかどうかを確認するため、学期末にはアンケートを実施し客観的評価を得られるように務めている。それをもとに専任・非常勤教員は授業改善を行っている。また、留学生センターの活動の周知については、センター刊行物やホームページを通じて行っている。ホームページの情報は頻繁に更新されるようになり、訪問者数も1万人を突破している。引き続き最新情報をいち早く掲載することに務めると共に、多言語化も視野に入れることを検討したい。

3. 領域別の自己点検評価

(1) 教育の領域

基準 5 教育内容及び方法

基準 6 教育の成果

基準 7 学生支援等

基準 9 教育の質の向上及び改善のためのシステム

選択的評価基準 B 正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況

ア 教育の目標・成果に関する事項

(1) 観点ごとの分析

基準 5-2 教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。

基準 5-3 成績評価や単位認定、卒業認定が適切であり、有効なものとなっていること。

基準 6-1 教育の目的において意図している、学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等に照らして、教育の成果や効果が上がっていること。

基準 7-1 学習を進める上での履修指導が適切に行われていること。また、学生相談・助言体制等の学習支援が適切に行われていること。

基準 9-1 教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて改善・向上を図るための体制が整備され、取組が行われており、機能していること。

(観点にかかる状況)

留学生センターの教員は、留学生センターにおける日本語教育科目・コース以外にも、正規課程の学生への教育サービスに当たる 1) 教養教育の「日本語 Ia」、「日本語 Ib」、「日本語 Ic」、「日本語 IIa」、「日本語 IIb」、「日本語 IIc」(紀要 8 号、125～126 ページ、156～157 を詳しくは参照)、2) 文化教育学部日本語教師養成科目の「日本語教育概論(1 年後期)」、「日本語教授法 I(2 年前期)」、「日本語教授法 II(2 年後期)」、「日本語教育実習(3 年前期)」、3) 教養教育 1 部会の「統語論入門：佐賀西部方言を初期射程にして」を教えているが、それらについては、提供・開講部局である全学教養教育機構と文化教育学部に自己点検を任せ、ここでは割愛する。

以下省略

イ 教育内容・活動に関する事項

(1) 観点ごとの分析

基準 5-2 教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。

観点：5-2-①：教育の目的に照らして、講義、演習、実験実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。（例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用等が考えられる。）

（観点にかかる状況）

ア同様、ここでは割愛する。

以下省略

ウ 教育環境に関する事項

(1) 観点ごとの分析

基準 7-2 学生の自主的学習を支援する環境が整備され、機能していること。また、学生の活動に対する支援が適切に行われていること。

観点 7-2-① 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

（観点にかかる状況）

イ同様、ここでは割愛する。

以下省略

エ その他教育に関する事項

選択的評価基準 B-1 大学の目的に照らして、正規課程の学生以外に対する教育サービスが適切に行われ、成果を上げていること。

(1) 観点ごとの分析

観点 B-1-① 大学の教育サービスの目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が周知されているか。

観点 B-1-② 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。

観点 B-1-③ 活動の結果及び成果として、活動への参加者が十分に確保されているか。ま

た活
動の実施担当者やサービス享受者等の満足度等から判断して、活動の成果が

っているか。

観点 B-1-④ 改善のための取組が行われているか。

(観点にかかる状況)

1. 日本語教育

§ 春学期

春学期は従来通り、日本語研修コース、SPACE プログラム、日本語総合コースの3つのプログラム別の日本語教育を行った。

<日本語研修コース>

日本語研修コースは、2人の専任講師と5人の非常勤講師によって、前学期のコース終了時の履修者アンケートなどを参考として、新学期に向けての計画が立てられた。今後受講生が研究室で研究を進めていくうえで十分な日本語能力を身に着けるために、研修コースのために編纂された『Situational Functional Japanese』を主教材として、様々な副教材を使いながら授業を運営することが計画された。

春学期の履修生は、大使館推薦の学生はおらず、学内募集による計6名であった。履修生に対する面接及びプレイスメントテストの結果、初級に相当する学生が5名、他の1名(前学期の初級クラス修了生1名)は中級レベルであったため、初級(週17コマ)と中級(週13コマ)の二つのクラスが開講された。コースの半ばには中間試験とスピーチ発表会、コース終了時には期末試験とオーラルインタビューによるテストが行われた。さらに、試験の成績・出席・宿題の提出などのデータをコースコーディネーターが取りまとめ、その結果を、各履修生に対しては成績・到達度票にコメントとして書き添えて渡し、各指導教員に対しては所見として書き添え報告した。

コース終了時に、履修生に対するアンケートを実施し、コースデザイン改善の参考資料とした。

両コースとも少人数クラスであり、授業効果が高く学生の到達度は高まったが、すべてのコマの履修が義務付けられているため、専門との兼ね合いで履修できない学生がいた。

<SPACE プログラム>

SPACE プログラムの日本語教育では、前年の秋学期から本プログラムに在籍している学生23名を対象として、2人の専任教員と3人の非常勤講師による初級後半、中級前半、中級前半の各6コマずつのコースの設定が計画された。今後、国に帰っても日本語の勉強につまづかないように、確固とした日本語の土台を作ることを目的として、文法を中心とした教科書を主教材として採用した。また、レベルごとにシラバスが作成され、学生たちに周

知された。

日本人との交流も本コースの特徴であり、日本人学生を招いたビジターセッションや、学期半ばにはスピーチ大会が企画実行された。

コース終了時に、履修生に対するアンケートを実施し、コースデザイン改善の参考資料とした。

<日本語総合コース>

初級から上級まで、幅広いタイプの受講生がいる日本語総合コースでは、専任講師 2 人と非常勤講師（謝金講師）4 人によって、初級ではいくつかのコマ（初級Ⅰ 5 コマ、初級Ⅱ 4 コマ）を合わせて受講するコースが、中級以降は技能別のクラス（中級 4 コマ、中上級 3 コマ、上級 3 コマ）が計画され、開講された。各レベル別、クラス別のシラバスが計画され、プレースメントテストの結果、全 87 名の学生が 5 つのレベルに分けられた。

コース開講前に、講師会議が開かれ、連絡事項等が共有された。授業は、学期開始前の計画に則りながら、適宜変更を加えて進められた。上級クラスでは、日本人学生を招いてのディスカッションなども行われた。

§ 秋学期

秋学期以降は、プログラム別に組まれていたカリキュラムを改め、アカデミック・ジャパニーズ（以下、AJ）を、全レベルを貫く目標として掲げ、Can-do Statements（何ができるようになるのかを明示した一覧表）を作成し、それに基づいて各レベルでの教育が行われることになった。

この秋学期以降のカリキュラム改革にあたっては、バックワード・デザイン（backward design）の考えが採用されている。具体的には、

- ① 留学生は何を求めているか、留学生にとって何が必要か、留学生にどんな力をつけてあげたいかを考え、
- ② そのニーズを満たすために、大きな学習目標を立て、その目標に基づいて学習する項目を決め、
- ③ その学習項目をマスターできたかどうかを決定するためのテストを作成し、
- ④ そのテスト合格を達成するために、必要な教材を選び／作成し、
- ⑤ その教材を最大限に活かすような教え方の工夫をする

という流れである。カリキュラム改革に着手したのは 2009 年 2 月であり、新たなカリキュラムが出来上がったのは 10 月であった。新たなカリキュラムにスムーズに移行するためには、「受講案内」に詳しい情報を掲載し、さらに「オリエンテーション」で説明を加える必要不可欠であった。

新カリキュラムでは、レベルは 6 つに分けられ、初級～初中級までは、6 コマ 1 まとまりとしてのコースをベースに、レメディアルという技能別のクラスが付け加えられ、よりき

め細やかに学生のニーズに対応できるようになった。のみならず、以前は専門との兼ね合いで履修できなかった学生も履修しやすくなった。

中級以上では、技能別のクラスが提供された（図1参照）。上級クラスでは、学内公募のGPシーズの支援を受け、「日本語でアカデミック」というタイトルで日本人学生にも授業を開放し、ライティングやスピーチのスキル学習の機会を提供した。

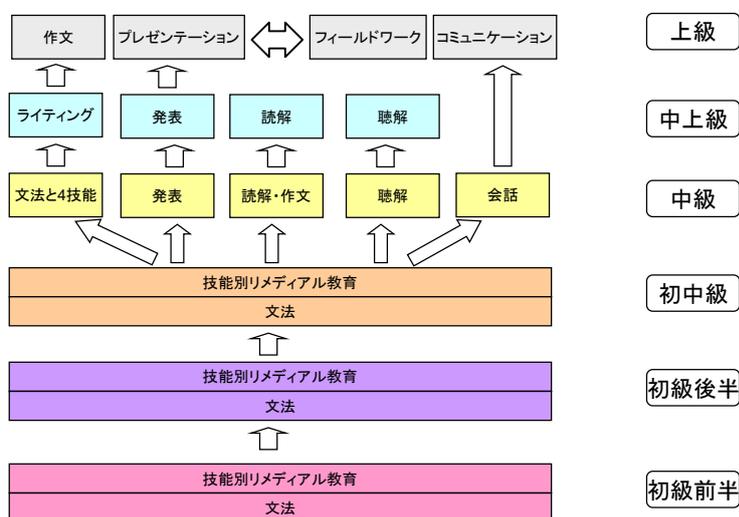
準備段階から専任教員（7名）とすべての非常勤講師（7名）が参加して進められ、各担当レベルごとに打ち合わせを経てカリキュラムが確定し、レベル間の調整が図られた。

すべての日本語授業のシラバスや受講方法などを掲載した受講案内（日英両言語併記）が作成され、受講希望の学生に配布された。受講希望の学生は、プレースメントテストを経て、6つのレベルに分けられた。

これらの情報は、留学生センターのホームページ、国際課の掲示板などを通じて、すべての学生に周知された。

なお、新カリキュラム下での、研修コース修了生は、初級前半2名、初級後半1名、初中級1名であった。J-101、J-201、J-301の本編コース（週6回の授業）に加えて、各レベルで開講されているレメディアルの各授業（J-111、J-211、J-311）をすべて履修している受講生のみ、集中コースとしての研修コースの参加者とみなした。

佐賀大学日本語教育新カリキュラム



(図1)

2. 留学生センターが開講するプログラム：

SPACE

第8期後期（春学期）と第9期後期（秋学期）にSPACEで実施した「日本語」以外のことを点検する。

春：

第8期後期、09年春学期(2009年4月～9月)

第8期の学生は全員が後期も予定通り留学を続け、学生数は23名であった。出身国別の人数は、中国4名、台湾3名、インドネシア3名、タイ3名、フランス2名、ベトナム2名、韓国2名、カナダ1名、カンボジア1名、アメリカ1名、スリランカ1名である。また、受け入れ学部別に見ると、文化教育学部9名、経済学部5名、理工学部2名、農学部6名となっている。

SPACE学生用の英語で行われる専門科目として、留学生センターを含む各部局から10科目の提供があった。その中の日本事情研修Ⅱは、SPACE教員が交代で担当した。講義では、佐賀西部方言の動詞と時制の形態(例「食べる」の佐賀西部方言の対応する動詞は「食ぶっ」)を議論した。学生自身による日本文化・事情の調査発表については、日本文化や日本人に関して日本人学生にインタビューし、個人発表を行った。

学外研修では、玄海エネルギーパークと福岡市民防災センターを見学し、また、鹿島の高校生と交流し、鹿島市でホームステイを体験し、鹿島ガタリンピックに参加した。文化研修では、茶道を体験した。

学期末には、スピーチ発表会を行った。なお、スピーチの原稿は『08秋-09春学期 佐賀大学短期留学プログラム(SPACE)報告』に掲載した。

第8期後期（春学期）の行事

4月10日	授業開始
4月30日	学外研修：玄海原子力発電所、福岡市民防災センター見学
5月14日	日本人学生との会話（JL2）
6月6日	学外研修（鹿島の高校生と交流およびホームステイ、 鹿島商店街祭り見学）
6月7日	学外研修：鹿島ガタリンピック参加
6月11、18日	日本文化研修：茶道
7月16日	スピーチ発表会
7月22日	日本人学生とのディスカッション(JL3、4)
8月21日	修了式

なお、詳細は、『08秋-09春学期 佐賀大学短期留学プログラム・スピーチ報告書』（08 Fall-09 Spring SPACE Report、Including Students' Speeches）を参照してほしい。

秋：

第9期前期（秋学期）にSPACEで実施した「日本語」以外のことを点検する。第9期の学生数は20名で、出身国別の人数は、韓国3名、中国3名、台湾4名、インドネシア3名、スリランカ2名、タイ1名、ベトナム1名、バングラデシュ1名、フランス2名である。また、受け入れ学部別に見ると、文化教育学部7名、経済学部6名、理工学部2名、農学部5名となっている。

SPACE学生用の英語で行われる専門科目として、留学生センターを含む5部局から10科目の提供を受けている。特に「日本事情研修Ⅰ」は、SPACE教員が交代で担当した。1人の教員の講義では、『がばいすごか！ 佐賀弁辞典』（NBCラジオ佐賀（株）西日本情報センター発行）のCDに録音されている佐賀西部方言の会話をいくつか聞き、同方言のさまざまな現象を観察した。もう1人の教員の講義では、日本人・日本社会に関するデータや、ことばを手がかりにして、日本人・日本社会・文化について論じ、ディスカッションを行った。また、学生たちは、日本文化・事情に関するアンケートを用意し、日本人学生および留学生に対して、アンケート調査およびインタビューを行い、グループで発表を行った。

学外研修では、バルーンフェスティバルと伊万里大河内山・吉野ヶ里歴史公園に出かけた。大河内山では、焼き物の絵付けも体験した。文化研修では、剣道部に依頼して、剣道体験をした。いずれの研修においても、日本人学生に参加してもらうことによって、異文化交流を図ることができた。

第9期前期（秋学期）の行事

10月1日	オリエンテーション
10月2日	日本語プレースメント・テスト
10月6日	入学式
10月7日	授業開始
10月30日	学外研修：バルーンフェスティバル
11月21日	学外研修：伊万里（焼き物の絵付けも体験）、吉野ヶ里歴史公園
1月23日	日本文化研修：剣道体験（佐賀大学剣道部の指導）

日本語研修コース

春：上述したように、計6名の学生が参加し、日本語授業のほかに、学外研修（玄海原子力発電所・福岡防災センター）が行われた。

秋：上述したように、計4名の学生が研修コースとして認定された。

日本語・日本文化研修生

日本語・日本文化研修生は、文科省の奨学金を得て日本語や日本文化の研修を1年間行う学生である。本学では留学生センターが受け入れとなっているが、留学生センター開講科目だけではなく、幅広い専門知識を身につけるため、全学教養教育機構、文化教育学部

と緊密な連携をとった、プログラム運営を行っている。そのため、全学教養教育機構、文化教育学部と受講可能科目や単位認定の方法などについても調整を行った。

日本語・日本文化研修留学生用の募集要項も改訂掲載した。

本年度の秋学期から、ベトナム人学生一人の応募があり、文化教育学部と協議の結果受け入れを決定した。文化教育学部のチューター学生が一人、日常生活の支援にあたったのに加え、留学生センターの教員は、週1回相談の時間を設けて、日本語や生活指導に当たった。コース開始時には、受講すべき科目の指導なども行った。

学期中は、留学生センターが主催する剣道体験や沖縄旅行などにも参加して日本文化体験行事にも積極的に参加した。

3. 他の教育サービス：

1) 留学生引率研修旅行等：

日本語や日本文化により深く接し、留学生相互の交流を深めるための引率旅行は、1) 主に、留学生センターが開講／運営しているプログラムの学生を対象にしたものと、2) 全学の留学生を対象としたものが行われている。1) は上述の通りである。2) は、2泊3日の見学旅行が2度企画された。一つ目は9月に行われた関西方面への旅行であり、二つ目は2月に行われた沖縄方面への旅行である。関西方面へは留学生35名、引率2名(国際課1名)が、沖縄へは留学生51名、引率2名が参加した。加えて、交流促進と引率補助のための日本人学生がそれぞれ3名と7名参加した。いずれの旅行についても、男女別、出身国の偏りがないよう組まれたグループ(日本人学生一人含む)に分かれて見学を行った。学生たちの反応はよく、日本文化への理解や学生同士の交流が深まったと考えられる。

2009 (平成 21) 年度	
4月30日(木)	日本語研修コース・短期留学プログラム学外実地研修(唐津市・福岡市) 引率者：浅岡、古賀、丹羽、山田
6月6日(土)	鹿島高校と留学生の交流会、鹿島市ホームステイ、鹿島ガタリンピック参加(鹿島ガタリンピック実行委員会主催)(7日まで) 引率者：古賀
7月6日(木)	短期留学プログラムスピーチ発表会
9月7日(月)	外国人留学生見学旅行(京都・大阪・奈良)(9日まで) 引率者：中山
11月17日(火)	日本語研修コース・短期留学プログラム学外実地研修(伊万里市・吉野ヶ里遺跡) 引率者：古賀、丹羽
2月4日(木)	外国人留学生見学旅行(沖縄)(26日まで) 引率者：丹羽、山田

2) 留学生センターホームページ：

留学生センターのホームページが新装された。URL：<http://www.isc.saga-u.ac.jp/>。センター長のメッセージや、専任教員のリストと自己紹介、研究実績、国際課の職員のリストなどが閲覧できるほかに、「日本語プログラム受講案内」（日本語版・英語版）や「受講申し込みの手続き」（日本語版・英語版）、「SPACE 募集要項」「願書の様式」（PDF 版・MSWord 版）、特別聴講外国人学生用の願書がダウンロードできる。さらに、留学生のためのアパート・寮、佐賀での生活情報、佐賀大学への入学情報などと、佐賀大学の学生（日本人向け）で海外留学に関心のある人のための情報、留学生のチューターに関する情報、海外留学のための奨学金情報、語学研修のお知らせなどが掲載され、新着情報は随時アップデートされている。この改訂によって、情報提供が幅広く公平に行われるようになった。HP の表紙写真は以下：



3) 留学生交流室

自習、および交流のために設けられている留学生交流室が 12 月に移転した。従来の部屋が狭かったことがネックとなり、さまざまな交流が行われにくくなっていたが、移転に伴い、広い部屋に移ることができた。具体的な活用方法によっては、有益な部屋になりうるだろう。

4) 留学報告会

海外の協定校に留学していた学生たちによる留学報告会が 10 月に行われた。留学の成果を報告するとともに、今後留学したいと考えている日本人学生たちに、体験を伝えてもらうのが趣旨である。5 人の学生からの体験の報告があり、留学を考えている学生たちの参加になった。報告会の後、アンケート調査を行い、報告会実施時期、報告内容などについて参加者の意見を聞いた。おおむね肯定的な意見が多かった。

5) 学生国際交流シンポジウム

日本人学生と留学生の相互理解と交流を深めるために、10月24日から25日に、「九州地区・国立大学・九重研修所」で学生国際交流シンポジウムが行われた。参加人数は29名（日本人学生12名、留学生19名）であった。留学生と日本人学生は2～3人ずつ、グループを12作り、グループで話し合ったテーマについて、発表を事前に準備し、当日、発表しました。10日ぐらい前に説明会を開き、グループ決めをし、その後、学生は、各グループで、どのようなトピックについて発表するか話し合い資料を作ってから、シンポジウムに臨んだ。シンポジウムは、第1日目の午後と夜の2回、行いました。自分達の国における個人的な体験を教え合いました。発表の準備や発表を通して、グループ内で懇親できた。翌日は、夢の大吊橋、ビール工場へ行った。

(分析結果とその根拠理由)

分析1：本年度の秋に、カリキュラム改善が行われ、それぞれの日本語コースや科目の目標が明確にされ、授業内容が高度、豊かになり、かつ、簡潔になった。

根拠：秋学期からのカリキュラム改革によって、カリキュラムを簡潔にでき、プロジェクトワークなど応用的なものを追加することができた。さらに、春学期以前は、コースによって受講者数の偏りがあり、全体として教育効果を見たときに、非効率的な部分があったが、新カリキュラムで、学生の属性別ではなく、レベル別でコースを編成したため、このような非効率性は減った。加えて、各レベルに専任教員を配し、統一した目標の下、非常勤講師とも連絡を緊密にとってコース運営が行える体制が整ったことにより、SPACEをはじめ、プログラムの日本語コースが改善されたと考えられる。

分析2：日本語教育でのノウ・ハウを日本人学生にも提供する工夫がなされている。

根拠：従来から、留学生センター教員は、文化教育学部の授業や教養教育の授業を担当していたが、それは専門に関することであった。しかし、秋学期から、日本語コースの上級クラスを日本人学生にも開放することによって、発表の仕方、レポートの書き方など、日本語教育学が得意としてきたアカデミックスキル養成を日本人学生にも提供することができた。

分析3：日本人学生と留学生の交流が盛んになるような工夫が、引き続きなされている。

根拠：唐津・福岡実地研修、関西方面への旅行、伊万里・吉野ヶ里研修、沖縄旅行などには、日本人学生が引率補助と交流促進という名目で参加し、旅行を機会に留学生と交流している。また、国際シンポジウムでは日本人学生と留学生の交流をさらに促進させるた

めに、従来以上に、発表する以前の準備段階に力を入れ、留学生と日本人学生が同じグループで、発表のために協力するなど、単に宿泊を共にすることを越えて、交流を深めるための工夫が行われている。また、日本語の授業の中でも留学生と日本人学生がともに学ぶための「日本語でアカデミック」や、留学生用の授業に日本人学生を招いてのビジターセッションなど、さまざまな交流促進のための試みが継続されている。

分析 4：情報提供が大幅に改善された。

根拠：改訂された留学生センターの HP では、新着情報が次々に掲載されている。これまでは掲示板のみで知らせていた佐賀大学の日本人学生のための情報と留学生のための情報が HP 上で瞬時に見られる。日本語の受講生のための情報も随時、更新されている。これは情報提供という点で大きな発展だろうと考えられる。しかし、その運営のために、HP 担当教員は非常に大きな負担をしいられている。

分析 5：SPACE における日本語教育は秋以降、大幅に改善された。

根拠：SPACE に参加する学生も、先述した質が高まった新カリキュラムの日本語科目・コースを秋から取れるようになった。本年度秋学期では、新カリキュラムの SPACE における日本語の受講者は、初級前半が 11 名、初級後半が 1 名、初中級が 4 名、中級が 2 名、中上級が 2 名であった。新カリキュラムでは、中級コースは専任教員によるセンター日本語教育新カリの目標に従い、専任教員の指導のもと、それぞれのテーマの科目に共有の目標が設定され、また、テーマごとに中間・期末テストも担当の教師が行えるようになり、改善された。

分析 6：SPACE の農学部への応募者数が増加した。

根拠：SPACE の農学部受け入れを希望する応募者数が増加した。受入数も 5 名と増加した。これは、農学部が学部の教員とその研究リストを SPACE 応募者にも留学生センターの SPACE のホームページを通して見えるようにし、また、農学部の受け入れは自主研究をする学生のみとしたことで、優秀な学生が応募しているからである。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

以前から指摘されていた属性別の日本語コースの非効率を改め、新たな日本語カリキュラムを作ったことは、大いに評価される。また、留学生センターの HP の改訂によって、留学生、日本人を問わず、情報提供が幅広く行われるようになったことも、評価できる。また、留学生センター教員が、留学生のみならず、日本人学生へもアカデミックスキル養成の授業を提供したことは新しい試みとして評価できる。加えて、国際シンポジウムやビ

ジターセッションなどが引き続き行われ、留学生の日本人学生の交流への工夫が維持されているといえる。さらに、留学報告会やHPでの情報提供を通じて、これから留学を考えている日本人学生に対するサービスも適正に維持されている。

(改善を要する点)

1. 日本語教育：新カリキュラムへ移行して1学期目であるために、総合的な判断を下すことはできないが、履修手続きにおける混乱等をなおすようにするべきであろう。さらに、各科目やコースで、アンケートを使って、さらに、授業内容やレベルやコースの棲み分けの改善が求められる。また、受講者数については履修者数と成績取得者数が異なるコースや科目もあり、受講者数に応じて、科目やコースの追加や廃止をしなければならない。
2. SPACE：学部の教員とその研究内容のリストは、SPACEにおける農学部の応募者数の増加や農学部の留学生センター運営委員からの受け入れ学生に関する口頭報告からわかるように、いい効果を及ぼしている。他学部でもこれにならって、積極的な学部の教員とその研究内容のリストの公開等が求められる。
3. 日本語受講に関する問い合わせ及び申し込みの手続きは、国際課の職員の協力のもとに行われ、受講者の登録手続きは教員が行っているというのが実状であり、国際課の職員及び担当教員にとっては過大な負担となっており、本活動の維持には新たな人員の配置が必要である。
4. 留学生センターのHPはとてもよくなっているが、その管理や更新のために担当する教員のかなりの時間と神経を使う細かい作業と労力が費やされており、その軽減のためになにか方策を考慮しなければいけない。

(3) 選択的評価基準Bの自己評価

日本語教育新カリキュラムは、改善点が認められるものの、全体としてはいい方向に向かっている。各プログラム運営は、SPACEは順調に進んでおり、さらに、日本語・日本文化研修生の受け入れが今年度1名あったことは、留学生センター開講のプログラムとしては従来の努力が実ったものと考えられる。教育サービスである留学生交流室の留学生と日本人学生への開放とホームページの充実が格段に進み、良好である。これらのことから、本センターの正規学生以外の学生への教育は、充実し、前進しているといえよう。

(2) 研究の領域

ア 教員及び教育支援者に関する事項

(1) 観点ごとの分析

観点 3-3-1：教育の目的を達成するための基礎として、教育内容等と関連する研究活動が行われているか

(観点に係わる状況)

留学生センター教員の主たる教育内容は、留学生に対する「日本語学習支援」並びに「生活支援」であるが、教員の業績の多くは「日本語学習支援」の分野に主に含まれ、以下のように分類可能である。(分類に用いられる番号は、別紙[センター教員の研究状況]と対応している。以下、同様である)

1. 日本語学習支援に関わるもの
 - a. 日本語の指導法
10、 32
 - b. 教材開発
24
 - c. 学習環境
1、 2、 3
 - d. 学習内容
18、 19、 20、 21、 23、 25、 26、
 - e. 日本語教育支援者の育成
4、 5、 6、 7、 8、 11、 12、 13、 14、 15、 16、 17、 29、 30、 31、
 - f. その他
9
2. 生活支援に関わるもの
22、 27、 28、

(分析結果と、その根拠理由)

上掲のデータが示すとおり、「目的の達成状況はおおむね良好である」と考えられる。

イ 選択的評価基準A 研究活動の状況に関する事項

A-1 大学の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能していること。

観点 A-1-①：研究の実施体制及び支援・推進体制が適切に整備され、機能しているか。（該当なし）

観点 A-1-②：研究活動に関する施策が適切に定められ、実施されているか（該当なし）

観点 A-1-③：研究活動の質の向上のために、研究活動の状況を把握し、問題点等を改善するためのシステムが適切に整備され、機能しているか（該当なし）

A-2 大学の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっていること

観点 A-2-①：研究活動の実施状況から判断して、研究活動が活発に行われているか。

（観点到係わる状況）

上掲の項目別に分類すると、以下のようになる。

1. 研究出版物

著書

4

審査論文

2、25、29

論文（審査なし）

1、5、6

報告書

なし

その他

7

2. 研究発表

3、9、18、19、26、27、28、30、31

3. 特許

なし

4. その他の成果物の公開

10、11、12、13、14、15、16、17、21、22、23、32

5. 国内外の大学・研究機関との共同研究

8、20、24

6. 地域との連携

21、22

7. 競争的研究資金への応募

8、20

(分析結果と、その根拠理由)

上掲のデータに基づけば、「目的の達成状況はおおむね良好である」と考えられる。現在 7 名の専任教員の存在を考えると、上記の数字は特に多いとは言えないのが事実であろう。日本語学・日本語教育学などの研究分野では研究プロセス自体にかかる時間が長いことが数字の少なさの原因となっていることを鑑み、「おおむね良好」との判断を下すに至ったが、今後はさらに活発な研究活動が望まれる。特に、著書や審査論文の形で、研究成果をこれまで以上に公にすることが求められるであろう。

観点 A-2-②: 研究活動の成果の質を示す実績から判断して、研究の質が確保されているか。

(観点に係わる状況)

教員の研究業績の中で、上掲の項目で該当するのが、「競争的研究資金の獲得状況」である。獲得した競争的資金に該当するのは、教員業績の「20」(研究代表者として)および「8」(研究分担者として)である。他の項目「外部評価」「研究プロジェクト等の評価」「受賞状況」などに関しては、特に該当なし。

(分析結果と、その根拠理由)

「日本語学習支援」並びに「生活支援」を主たる業務としていることを鑑み、「目的の達成状況がおおむね良好である」との判断を下すに至ったが、今後はさらに質の高い研究活動が望まれる。上掲の「実績」項目のうち、センター教員にとって実現の可能性が最も高いと考えられる「競争的研究資金」への、これまで以上の積極的な応募が必要だと思われる。

観点 A-2-③: 社会・経済・文化の領域における研究成果の活用状況や、関連組織・団体からの評価から判断して、社会・経済・文化の発展に資する研究が行われているか。

(観点に係わる状況)

留学生センター教員の研究内容は、その分野の性質上、特に「社会」そして「文化」の発展に資する研究であると考えられるのであるが、その成果の「活用状況」に関するデータや、「関連組織・団体からの評価」に関するデータが得られていないため、判断が困難である。外部評価の導入などにより、より客観的な判断が可能になるとと思われる。

(分析結果と、その根拠理由)

上記の理由により、目的の達成状況に関する判断は困難である。

[別紙資料]

ウ 平成21年度の留学生センター教員の研究状況

[年度計画]

海外も含め、学外の研究会、学会などで研究発表を行う。

[年度末の進捗状況]

今年度の活動としては、海外の学会・研究会における発表は2件（2カ国：フランス、オーストラリア）、国内での学会・研究会発表は7件であった。その発表題目、学会名など詳細については、毎年度末に発行するセンター紀要に掲載している。

[各教員の研究業績]（1、2、3…の番号は、自己点検評価で使用する通し番号）

浅岡 高子

論文

1. 「日本人学部大学生のオーストラリア留学での勉学について—大学間交流協定の交換留学生の場合」 萬美保・村上史展編『グローバル化社会の日本語教育と日本文化』、164-173頁（2009.7）
2. “The contribution of “Study Abroad” Programs to Japanese Internationalization”（浅岡高子／矢野 順との共著） *Journal of Studies in International Education*, Vol.13, Number 1, pp174-188. Sage Publications（2009.6）

口頭発表

3. 「海外留学と勉学—オーストラリアの大学に交換留学した学部生のケーススタディー」第14回留学生教育学会（長崎大学）（2009.8）

横溝 紳一郎

著書

4. 「教師が共に成長する時—協働的課題探究型アクション・リサーチのすすめ—」 吉田達弘・玉井健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介編『リフレクティブな英語教育をめざして—教師の語りが拓く授業研究—』ひつじ書房、75-118頁（2009.10）

論文

5. 「教師はどうやって学習者のやる気を引き出すのか」『BATJ Journal』No.10、The British

Association for Teaching Japanese as a Foreign Language、49-67 頁(2009. 9)

6. 「過密スケジュールの日本語教育実習で実習生はどのように変容するのか」『佐賀大学留学生センター紀要』第 8 号、13-29 頁 (2009. 3)

雑誌記事

7. 「学び続ける日本語教師になろう」『月刊日本語』12 月号、60 頁(2009. 11)

共同研究

8. 科学研究費補助金 基盤研究(C) 「第二言語教育に特化した教師ナラティブ研究の理論的・実証的展開」平成 21~23 年度 研究代表者 柳瀬陽介

口頭発表

9. 「日本語教育研究は『楽しい研究』か」平成 21 年度日本語教育学会春季大会、河野俊之氏・小林ミナ氏との共同発表 (明海大学) (2009. 5)

講演

10. 「学習意欲について考えてみよう」川口義一氏との共同講演、平成 21 年度日本語教育学会第一回研究集会、宮崎大学 (宮崎市) (2009. 5)
11. 「教師はどうやって学習者のやる気を引き出せるのだろう」川口義一氏との共同講演、平成 21 年度日本語教育学会第一回会員研修、宮崎大学 (宮崎市) (2009. 5)
12. 「教師としての自分を丸ごと見直して、明日への第一歩を踏み出そう！」河野俊之氏との共同講演、2009 年度日本語教師研修コース集中合宿、海外職業訓練協会 (千葉市) (2009. 8)
13. 「アクション・リサーチとメンタリング」関西英語教育学会第 17 回セミナー、神戸市外国語大学 (神戸市) (2009. 10)
14. 「学習者のために教師ができること・すべきこと」釜山日本語教師会定例会、釜山韓日文化交流協会 (釜山市、大韓民国) (2009. 10)
15. 「教師の役割」京都外国語大学日本語教育講演会、京都外国語大学(京都市) (2009. 11)
16. 「大学院／教育現場で、学ぶ・探る・成長する」言語系春のコロキアム講演会、北海道大学 (札幌市) (2010. 3)
17. 「教師の役割：学習者のために教師ができること・すべきこと」グローバルブリッジ日本語教師養成講座第 1 期生修了記念特別講座、久留米ゼミナール (久留米市) (2010. 3)

古賀 弘毅

口頭発表

18. Koga, Hiroki and Ono Koji, 'Surface constraints on multiple default morphemes of tense', 9th International Conference on Tense, Aspect and Modality, Université Paris-Diderot-Paris 7 & University of Chicago Center in Paris, (2009.9).
19. Koga, Hiroki and Ono Koji, 'Surface constraints on multiple default morphemes of tense', Morphology and Lexicon Forum 2009 (MLF2009), (2009.7), 東北大学.

共同研究

20. 科学研究費補助金：平成21年度～平成23年度 基盤研究（C）「時制の無標形態素の連続生起、および、動詞の基底形に関する理論的・実証的研究」 課題番号：21520410
研究代表者：古賀弘毅.

講演

21. 佐賀大学経済学部・平成21年度「ゆっつらーと街角大学座学コース」第21回、「佐賀西部方言を「科学しよう！」シリーズ④、佐賀西部方言の可能文「インドネシア語の読みゆっ」はなぜ非文か：可能形態と時制の無標形態との補語（語幹）が差異化された接辞」、(2009.11)、ゆっつらーと館（佐賀市）.
22. 講演「志を持つこと：周りと関わって生きることから」、佐賀県小城市・芦刈中学校立志式、(2010.1).

研究会口頭発表

23. 「補語（語幹）が差異化された接辞：可能形態と時制の無標形態」、人工頭脳工学研究会 (2009.12)、佐賀大学理工学部にて.

フォード 丹羽 順子

共同研究

24. 「コミュニケーションのための日本語ウェブ教材の作成と試用」（科学研究費補助金 基盤研究（A） 課題番号 21242012）

下條 正純

論文

25. 「川端康成『乙女の港』の人物関係と女学生ことば」『表現研究』第90号、40-49頁(2009.10)

口頭発表

26. 「『乙女の港』女学生言葉から見る人物描写」2009年度豪州日本研究大会・日本語教育国際研究大会（ニューサウスウェールズ大学）（2009.7）

中山 亜紀子

口頭発表

27. 「日本で大学生として生きる－韓国人留学生のライフストーリーから」リテラシーズ研究集会 2009（早稲田大学）（2009.9）
28. 「第二言語を使って生きるという体験－アイデンティティの（再）構築をめぐって」日本語教育学会 2009年度秋季大会（九州大学）（2009.10）

山田 智久

論文

29. 「教師の視点の検証 -PAC 分析調査から見えてきた違いを中心に-」日本語教育方法研究会会誌 vol117-1. 印刷中（2010.03）

口頭発表

30. 「教師の視点の検証 - PAC 分析調査から見えてきた違いを中心に -」日本語教育方法研究会、第34回研究会（東京農工大学）（2010.03）
31. 「教師のビリーフの検証 ～視点の違いを中心に～」北海道大学国際広報メディア観光学院 平成21年度 春のコロキアム（2010.03）

講演

32. 「第二言語習得研究の変遷 ～研究知見をどのように日本語教育に生かせるか～」久留米（久留米セミナー）（2009.12）

学生支援の領域

基準 7 学生支援等

ア 教育に関する事項(留学生の修学/日本人学生の留学/留学生と日本人学生の交流等)

(1) 観点ごとの分析

基準 7-1 学習を進める上での履修指導が適切に行われていること。また、学生相談・助言体制等の学習支援が適切に行われていること。

観点 7-1-1 : 省略

観点 7-1-2 : 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

(観点到に係る状況)

平成 21 年度は、表 1 のとおり相談時間を設け、担当時間の教員が研究室で待機した。また、設定されたこれらの時間以外にも、学生からの相談に対して柔軟に応じた。

表 1 平成 21 年度相談担当時間

	前学期	後学期
月	4 時限 丹羽	4 時限 丹羽
火	4 時限 横溝・古賀	4 時限 横溝・古賀
木	3 時限 下條	3 時限 下條
	4 時限 浅岡・中山・山田	4 時限 浅岡・中山・山田

平成 21 年度の相談内容は、表 2 が示すとおり、相談件数計 185 件中、約半数の 98 件が留学生からの日本語に関する相談であり、日本語学習のほか、研究計画書などの日本語記述についての質問等が含まれる。表中「修学」の「他」には、日本語科目の受講手続や証明書発行に係る相談が分類されている。一方、日本人学生の修学に関する相談内容は海外留学に関するものが多かった。海外留学の指導や助言は英語教育部門に委ねられているが、実際には留学生教育研究部門の教員による対応が少なからぬことが分かる。このように、留学生、日本人学生からの広範な相談に対応している。

表 2 内容別相談件数

	修 学		異文化 交流	生活	他	計
	日本語	他				
留学生	98	15	1	13	2	129
日本人 学生	30	6	5	3	12	56

(分析結果とその根拠理由)

前学期、後学期ともに、相談の時間を比較的学生の利用しやすい午後に設定して、留学生センターの専任教員が相談に応じる体制を敷いている。また、相談の多くを占める設定時間外の来訪にも柔軟に対応している。その結果、相談に訪れる学生も多く、学生にとって利用しやすい相談体制が整っていると言える。

観点 7-1-3 : 省略

観点 7-1-4: 特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあるか。また、必要に応じて学習支援が行われているか。

(観点に係る状況)

来日後一年以内の外国人留学生を対象として、彼らの学習・研究の促進、及び修学・生活環境への早期適応を図るため、学生チューターを配置して、講義説明・研究実験指導を中心に、日本語指導、日常生活の世話等の課外指導やアドバイスを行っている。チューターは、留学生の修学上のニーズや便宜に配慮し、多くは同じ研究室の学生等、学習・研究分野の共通する者の中から留学生指導教員が推薦する制度にしている。また、「チューターの手引き」(資料 5) を用意し、予めチューターに配布して、任務等の諸説明を行っている。同手引きは適宜修正を行っており、平成 21 年度も一部記述を改めた(チューター指導の実施場所、謝金支給、実施報告書の作成および提出)。(別添「チューターの手引き」(資料 5) 参照)

チューターの配置状況	平成 21 年前学期	64 名
	平成 21 年後学期	101 名

「チューターの手引き」の内容	・チューター制度について
	・チューターの任務と心構え

- ・チューター特別指導実施要領
- ・問い合わせ先・関係書類提出先

(分析結果とその根拠理由)

特別な支援が必要であると考えられる来日一年目の留学生に対して、修学上の必要性に配慮した学生チューターを配置するシステムが整っている。平成21年度は、前年度と同様、配置されたチューターの人数が多く（平成20年度前学期67名、後学期89名）、チューター制度の周知と利用が進んでいることが窺える。また、チューターの学生に対して、チューター活動に係るマニュアルとして配布する「チューターの手引き」（資料5）も適宜改訂されており、総体的に制度は適正に機能している。

基準7-2 学生の自主的学習を支援する環境が整備され、機能していること。また、学生の活動に対する支援が適切に行われていること。

観点7-2-1：自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

(観点に係る状況)

平成21年12月に留学生センターが移転した際、留学生センター教員の研究室に隣接する一室（総合研究棟2階）を新しい留学生交流室とし、留学生の自習、交流の場として開放している。室内には、コンピュータ端末、テレビセット、ミーティングテーブル等を設置し、日本語・日本文化に関する刊行物など留学生向けの雑誌（例：『日本語ジャーナル』）をはじめ、文学、歴史など多分野の和書および洋書を配架している。また、従来は使用の都度学生が部屋の鍵を借出していたが、利便性向上のため、国際課職員が朝夕に鍵の開閉を行い、日中（9:00～17:00）は常時開放することとした。

(分析結果とその根拠理由)

留学生の自習や交流のために学生の利用しやすい棟内に部屋を確保して留学生交流室とし、備品や書籍を設置して学生の用に供している。また、平成21年度は、同室の移転を機に学生にとっての利便性を高め、移転前よりも多くの学生が利用するようになった。学生の自主的学習を支援する環境が整備され、有効に利用されていると言ってよい。

観点7-2-2：省略

イ 生活に関する事項

基準7-3 学生の生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われ

ていること。

観点 7-3-1：生活支援等に関する学生のニーズが適切に把握されており、健康、生活、進路、各種ハラスメント等に関する相談・助言体制が整備され、適切に行われているか。

(観点に係る状況)

「観点 7-1-2」で記したとおり、前学期、後学期とも学生相談の時間を設定し、留学生及び日本人学生からの相談に専任教員全員が対応している。また、留学生の健康管理とサポートのため、必要に応じて保健管理センターと連携・協力する体制をとっている。

(分析結果とその根拠理由)

「観点 7-1-2」に記述したとおり、学生のための相談時間を設定して留学生センターの専任教員が相談に応じる体制が整備されており、学習支援のほかに、健康、生活、進路、ハラスメント（留学生センター留学生教育研究部門からは教員一名がハラスメント相談員になっている）等さまざまな相談に応じ、留学生のニーズの把握と対処に努めている。このほか、留学生のニーズは、日々国際課を訪れる多くの学生をとおして同課でよく把握され、彼らへのサポートがなされている。また、必要に応じて保健管理センターと共同して、留学生の健康管理を支援している。

観点 7-3-2：特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への生活支援等を適切に行うことのできる状況にあるか。また、必要に応じて生活支援等が行われているか。

(観点に係る状況)

新入外国人留学生を対象として、留学生生活等に関する説明会を行っている。前年度までは年度初め（4月）のみに実施していたが、平成21年度からは年二回（4月と10月）行うこととした。オリエンテーションの内容は次のとおりである。（別添「平成21年度春季外国人留学生オリエンテーション」（資料7）「平成21年度秋季外国人留学生オリエンテーション」（資料8）参照）

春季オリエンテーション（4月10日実施）

- 1 留学生センター長挨拶
- 2 教職員の紹介
- 3 佐賀警察署員による講演
 - ① 留学中における安全・安心の日常生活の確保について

- ② 留学中の国内での交通安全について
- 4 日本語総合コースについて
- 5 留学生生活について
 - ① 佐賀市国際交流協会の紹介
 - ② 佐賀県国際交流協会の紹介
 - ③ 在留関係について（アルバイト手続きを含む）
 - ④ 奨学金について
 - ⑤ 住居について（保証人、留学生住宅総合補償）
 - ⑥ 留学生相談について
 - ⑦ 佐賀大学留学生会の活動について
 - ⑧ その他
- 6 質疑応答

秋季オリエンテーション（10月1日実施）

- 1 留学生センター長挨拶
- 2 教職員の紹介
- 3 留学生生活について
 - ① 佐賀市国際交流協会の紹介
 - ② 在留関係について（アルバイト手続きを含む）
 - ③ 奨学金、授業料免除について
 - ④ 住居について（保証人、留学生住宅総合補償）
 - ⑤ 留学生相談について
 - ⑥ 佐賀大学留学生会の活動について
 - ⑦ その他
- 4 佐賀警察署員による講演
 - ① 留学中における安全・安心の日常生活の確保について
 - ② 留学中の国内での交通安全について
- 5 質疑応答

（分析結果とその根拠理由）

日本での留学生生活に必要な情報を提供し、支援システムを周知するために、新入留学生を対象にオリエンテーションを実施している。特に、平成21年度は4月と10月の年二回実施して新入留学生への説明を徹底した。また、留学生の生活上の安全強化を図るために平成20年度から始めた佐賀警察署員による講演を平成21年度も継続して行った。このほか、佐賀大学留学生会長、佐賀市国際交流協会職員による説明などをおして、学生主体の活動や地域との交流行事など、多様な情報提供と案内を行っている。

観点 7-3-3：学生の経済面の援助が適切に行われているか。

(観点に係る状況)

奨学生等の選考について：

下記の奨学金等の受給者、受給候補者の選考を留学生センターで行っている。

- ・日本政府（文部科学省）奨学金
- ・留学生交流支援制度（短期受入れ）
- ・私費外国人留学生学習奨励費
- ・佐賀大学外国人留学生奨学金
- ・佐賀大学基金奨学金
- ・佐賀市留学生奨学金
- ・平和中島財団外国人留学生奨学金
- ・ロータリー米山記念奨学会奨学金
- ・実吉奨学金
- ・朝鮮奨学金
- ・ドコモ留学生奨学金
- ・アシュラン奨学金
- ・21世紀東アジア青少年大交流計画奨学金
- ・佐賀県『県民協働による私費留学生支援事業』奨学金
- ・木下記念和香奨学金
- ・佐川留学生奨学会佐川奨学金
- ・アジア国際交流奨学財団川口静記念奨学金
- ・交流協会奨学金
- ・サトー国際奨学財団奨学金

寄宿舎について：

佐賀大学の管理する寄宿舎に加え、NPO 法人国際下宿屋管理の宿舎等が外国人留学生の寄宿舎として利用されている。平成 21 年度は、国際交流会館入居者選考基準の改正（入居者選考時期の記述修正、選考基準の改定）を行った。（別添「国際交流会館入居者選考基準」（資料 9）、「NPO 法人国際下宿屋 宿舎一覧」（資料 11）参照）

佐賀大学管理宿舎

国際交流会館	学生用 47 室（単身用 40、夫婦用 3、家族用 4） 寄宿料月額単身室 7,200 円、夫婦室 11,000 円、 家族室 13,500 円
楠葉寮	留学生募集人員 8 名（私費外国人留学生、男 5・女 3） 寄宿料月額 5,300 円（共益費込）

NPO 法人国際下宿屋管理宿舎

一之瀬寮	単身女性 9 名、部屋代 10,000 円、共益費 500 円
大坪寮	単身男性 7 名、部屋代 10,000 円、共益費 1,250 円
青風寮	単身男性 28 名、部屋代 10,000 円、共益費 1,000 円
三溝寮	単身女性 6 名、部屋代 10,000～13,000 円、共益費 200 円
ホワイトハイツ	単身女性 7 名、部屋代 17,000 円
栄寮	家族・友人 15 組、部屋代 21,800 円、共益費 2,000 円
江頭寮	夫婦 2 組 4 名、部屋代 30,000 円

その他

佐賀銀行末広寮	2 名、部屋代 3,000 円
---------	-----------------

（分析結果とその根拠理由）

留学生に安価で安全な滞在施設を提供すべく、本学の管理する国際交流会館、楠葉寮に加え、NPO 法人国際下宿屋管理の寄宿舎等を確保している。また、留学生センターでは、各種の奨学金受給者等の選考を厳正に行うとともに、経済援助を受けていない学生に国際交流会館への入居を優先的に割り当てるなど、可能な経済的支援が適切に配分される工夫がなされている。選考基準の改定など、必要な修正も適宜行って適正な経済支援制度を維持している。

(2) 優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

留学生及び日本人学生のための相談時間、新入留学生のためのオリエンテーション、来日一年目の留学生のためのチューター制度など、学生の修学や生活を支援する体制が整えられており、適切に機能している。

（改善を要する点）

平成 21 年度は、留学生センター移転のため、留学生交流室も一時期使用できない状態となり、利用環境が整うまでに時間を要した。但し、再開後は従来以上に使いやすくな

り、学生が頻繁に利用している。

(3) 基準7の自己評価の概要

新入外国人留学生が佐賀大学での修学と留学生生活を然るべく開始できるように、オリエンテーションを実施して、日本での修学と生活に必要な情報及び支援体制を周知している。また、渡日後一年以内の留学生支援のためにチューター制度を設け、修学・生活上のニーズに応じている。チューターに対しては、マニュアルを改訂して常に適正な指示に努めている。また、学生相談の時間を設けて専任教員が待機するとともに、設定時間の内外を問わず、留学生からの日本語学習や進路の相談、日本人学生からの留学相談など、様々な相談に柔軟に応じている。実際に相談件数も多く、学生にとって利用しやすい環境が提供されていることが窺える。自主的学習の支援としては、留学生交流室を設置し、図書・備品を置き、留学生の学習の用に供している。寄宿施設については、大学管理の寮のほか、NPO法人管理の寄宿舎等を確保し、経済的負担の少ない住居の提供に努めている。また、大学寮の入居者選考では私費留学生を優先する等、経済的支援が留学生間に適切に配分されるよう配慮している。このような活動状況から、修学及び留学生生活に係る学生支援体制が適切に機能していると言える。

(4) 国際交流・社会貢献の領域

基準 国際交流

ア 教員および学生の国際交流に関する事項

基準 国際交流が活発に行われ、活動の成果が上がっていること。

(1) 観点ごとの分析

観点1 大学の目的に照らして、職員の国際交流が活発に行われており、活動の成果が上がっているか。

(観点到に係わる状況)

1. 教員の国際交流に関する実績

各教員の国際交流活動実績は以下のとおりである。

浅岡高子

2009. 9. 18-9. 27 台湾高雄市にある文藻外国語学院を訪問。佐賀大学と同学院間の学術交流協定書締結の調印式に参加。「佐賀大学海外日本語教育実習」に参加した。

2009. 10. 23-10. 26 中国・上海市での留学フェアに参加し、佐賀大学への留学情報を提供した。

横溝紳一郎

2009. 9. 18-9. 27 台湾高雄市にある文藻外国語学院で開催された「日本語教育実習」の引率・指導を行った。

2009. 10. 17 大韓民国釜山市釜山韓日文化交流協会で開催された「釜山日本語教師会」定例会で講演を行った。

2010. 3. 2-3. 6 ベトナムのハノイ国家大学で日本語教育学の集中講義を行った。

古賀弘毅

2009. 9. 3 9th International Conference on Tense、 Aspect and Modality、Universite Paris-Diderot-Paris 7 & University of Chicago Center in Paris に参加し、口頭発表(' Surface constraints on multiple default morphemes of tense')を行った。

2009. 9. 5-9. 6 フランス・オルレアン大学(佐賀大学学術交流提携校)を見学し、SPACE卒業生の家族を訪問し、交流をはかった。

フォード丹羽順子

2009. 7. 18-7. 19 台湾での留学フェアに参加し、佐賀大学への留学情報を提供した。

下條正純

2009. 7. 14-7. 16 豪州シドニーのニューサウスウェールズ大学で開催された 2009 年度豪州日本研究大会・日本語教育国際研究大会 (JSAA-ICJLE2009) に参加し、口頭発表 (『乙女の港』女学生言葉から見る人物描写) を行った。

(分析結果とその根拠理由)

教員の海外での国際交流活動実績については、『佐賀大学留学生センター紀要』に、毎年、年報として記載され報告されている。

観点 2 大学の目的に照らして、学生の国際交流が活発に行われており、活動の成果が上がっているか。

(観点に係わる状況)

2. 学生の国際交流に関する実績

2-1 短期留学プログラム

・短期留学プログラム (SPACE)

第 8 期 (2008. 10-2009. 9) の応募者数は 59 名で、受け入れ学生数は 23 名であった。一方、第 9 期 (2009. 10-2010. 9) の応募者数は 50 名で、受け入れ学生数は 20 名であった。

・短期留学プログラム (一般)

4 月入学の学生数は学部学生 24 名であった。また、6 月に大学院学生 1 名が入学した。10 月入学は学部学生 12 名であった。

2-2 海外語学研修、短期学生派遣プログラムおよび長期留学支援プログラム

海外語学研修、文化体験プログラム、サマープログラム、短期学生派遣プログラムおよび長期留学支援プログラムによる派遣数は以下のとおりである。

・海外語学研修：15 名

ラトロブ大学 (オーストラリア) 9 名、パシフィック大学 (アメリカ) 6 名

・文化体験プログラム：3 名

釜慶大学校 (韓国) 3 名

・サマープログラム：4 名

木浦大学校 (韓国) 2 名、中興大学 (台湾) 1 名、高雄医科大学 (台湾) 1 名

・短期学生派遣プログラム：17 名

スリビジャヤ大学（インドネシア）1名、オルレアン大学（フランス）3名、コロラド州立大学（アメリカ）1名、国民大学校（韓国）3名、マニトバ大学（カナダ）1名、パシフィック大学（アメリカ）1名、釜慶大学校（韓国）1名、ハノイ国家大学（ベトナム）1名、ペラデニヤ大学（スリランカ）1名、華東師範大学（中国）2名、中興大学（台湾）1名、カセサート大学（タイ）1名、

・長期留学支援プログラム：1名

イーストアングリア大学（イギリス）1名、

2-3 海外留学の派遣地域および派遣数

大学間の学術交流協定校は平成20年度まで61校だったのが、平成21年度は新たに4校増え、派遣大学数は65校になった。一方、学部間の学術交流協定校は平成20年度まで66校であり、平成21年度も同じく66校であった。

2-4 外国人留学生の地域国際交流行事への参加

21年度は、21の地域国際交流行事があった。そのうち、多くの外国人留学生が参加したのものとして、次の行事がある。

国際生け花教室（5/11～7/6）、地引き綱例会（7/18）、国際溪流滝登り in 七山（7/26）、栄の国まつり「総おどり」（8/2）、芦刈夏まつり2009（8/9）、映像づくり若者交流キャンプボランティア（9/18～22）、ふれあいボーリング大会（11/8）、秋季大名行列まつり（10/25）、小城市立幼稚園・保育園児との交流会（11/17～1/19）、佐賀でホームステイをしよう（11/21～23）、唐津アジア料理教室（1/17、23）。

その他、教員が留学生と一緒に参加し日本人との交流を促進支援したのものとして、鹿島ガタリンピック（6/6～6/7）がある。鹿島ガタリンピックには、短期留学プログラム（SPACE）の学生20名と他の留学生約10名が参加した。大会の前日には、鹿島高校の高校生と交流会（鹿島踊りを踊ったり、インドネシアのダンスを教えて踊ったりした）をもち、ホームステイをした。

また、第5回国際交流シンポジウムを開催し、留学生と日本人学生との国際交流を支援した。

中国人留学生は、毎年、中国春節パーティーを主催している。

（分析結果とその根拠理由）

短期留学プログラムによる受け入れ学生数、海外語学研修および短期・長期派遣プログラムによる日本人学生派遣数、さらに海外留学の派遣地域および派遣数に関しては、国際課に記録がある。外国人留学生の地域国際交流行事への参加に関しても、国際課に記録がある。

第5回国際交流シンポジウムに関しては、報告集を留学生センターホームページにア

ップする。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

教員の国際交流に関しては、海外の大学での研究発表、講演および集中講義が計4件行われている。

台湾および中国で開催された日本留学フェアに参加し、佐賀大学への留学について説明を行い、相談に応じた。

台湾高雄市にある文藻外国語学院と佐賀大学間の学術交流協定書の締結が行われた。そして、同学院で昨年度新たに始まった日本語教育実習の引率・指導も行われた。

以上の点から、教員の国際交流は活発に行われていると言える。

一方、学生の国際交流については、短期留学プログラム（SPACE）は定員20名に対し50名の応募があること、また、同じ大学からの応募が継続してあることから、プログラムが評価されていると言ってよいであろう。

本学の学生の海外留学については、派遣地域・数は大学間の学術交流協定校が65校、学部間の学術交流協定校が66校ある。これは、九州の他大学と比較すると、熊本大学の場合、大学間交流協定校45校、学部間学術交流協定校65校、鹿児島大学の場合、大学間交流協定校47校、学部間学術交流協定校31校となっており、佐賀大学は決して少なくないと言えよう。

留学生の地域国際交流行事への参加は多く、国際交流はうまくいっている。

(改善を要する点)

日本人学生の派遣に関しては、海外語学研修参加者数15名、文化体験プログラム参加者数3名、サマープログラム参加者数4名、短期学生派遣プログラム17名、長期学生派遣プログラム1名で、昨年度に比べ留学者数はやや減少している。日本人学生の海外留学は全国的に減少していると言われているが、今後、増加が期待される。

基準 社会貢献

イ 教育および研究における社会連携・貢献に関する事項

基準 教育および研究において社会連携・貢献が活発になされ、活動の成果が上がっていること。

(1) 観点ごとの分析

観点 大学の目的に照らして、教育および研究における社会連携・貢献が活発

になされており、活動の成果が上がっているか。

(観点に係わる状況)

1. 教育における社会連携・貢献に関する実績

各教員の教育における社会連携・貢献に関する活動実績は以下のとおりである。

横溝紳一郎

九州日本語教育連絡協議会の事務局長を2006年6月より務める。

フォード丹羽順子

九州日本語教育連絡協議会の佐賀地区委員を2007年4月より務める。

山田智久

九州日本語教育連絡協議会の委員を2009年4月より務める。

2. 研究における社会連携・貢献に関する実績

各教員の研究における社会連携・貢献に関する活動実績は以下のとおりである。

横溝紳一郎

- 2009.5 「学習意欲について考えてみよう」川口義一氏との共同講演、平成21年度日本語教育学会第一回研究集会、宮崎大学（宮崎市）
- 2009.5 「教師はどうやって学習者のやる気を引き出せるのだろうか」川口義一氏との共同講演、平成21年度日本語教育学会第一回会員研修、宮崎大学（宮崎市）
- 2009.8 「教師としての自分を丸ごと見直して、明日への第一歩を踏み出そう！」河野俊之氏との共同講演、2009年度日本語教師研修コース集中合宿、海外職業訓練協会（千葉市）
- 2009.10 「アクション・リサーチとメンタリング」関西英語教育学会第17回セミナー、神戸市外国語大学（神戸市）
- 2009.10 「学習者のために教師ができること・すべきこと」釜山日本語教師会定例会、釜山韓日文化交流協会（釜山市、大韓民国）
- 2009.11 「教師の役割」京都外国語大学日本語教育講演会、京都外国語大学（京都市）
- 2010.3 「大学院／教育現場で、学ぶ・探る・成長する」言語系春のコロキアム講演会、北海道大学（札幌市）
- 2010.3 「教師の役割：学習者のために教師ができること・すべきこと」グローバルブリッジ日本語教師養成講座第1期生修了記念特別講座、久留米ゼミナール（久留米市）

古賀弘毅

2009.11 「佐賀西部方言を「科学しよう！」シリーズ④」、佐賀大学経済学部・平成21年度「ゆっつらーと街角大学座学コース」第21回 ゆっつらーと館(佐賀市)

2010.1 「志を持つこと：周りに関わって生きることから」小城市芦刈中学校立志式(小城市)

山田智久

2009.12 「第二言語習得研究の変遷～研究知見をどのように日本語教育に生かせるか～」久留米セミナー(久留米市)

(分析結果とその根拠理由)

教員の研究における社会連携・貢献の実績については、『佐賀大学留学生センター紀要』に、毎年、年報として記載され報告されている。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

九州地区における日本語教育の発展のために、連絡協議会の事務局長および(佐賀地区)委員を3名の教員が担っている。また、研究における社会貢献は11件ある。

(5) 組織運営の領域

基準 11 管理運営

ア 管理運営に関する事項

基準 11-1 センターの目的を達成するために必要な管理運営体制及び事務組織が整備され、機能していること。

(1) 観点ごとの分析

観点 11-1-1: 管理運営のための組織及び事務組織が、センターの目的の達成にむけて支援するという任務を果たす上で、適切な機能を持っているか。また、必要な職員が配置されているか。

(観点到に係わる状況)

留学生センターは平成 12 年 4 月に文部科学省の省令施設として設置された。平成 14 年の大学法人化に伴い管理運営のための組織は理事 2 名とセンター長 1 名があたることとなった。事務は平成 17 年度に旧の留学生課と国際課が統合され国際課(職員 6 名、パート事務補佐員 2 名、国際アソシエイト 1 名)となり、学術研究協力部長が国際課を統括することとなった。国際課では留学生センターに関する業務と国際貢献推進室の国際交流に関する業務を担当している。このうち留学生関係業務の多くは教務事項であり、教務課と国際課の連絡を従前と同じように密にする必要がある。

(分析結果とその根拠理由)

学長をトップに、研究・国際貢献担当理事、教育・学生担当理事、国際貢献推進室長、留学生センター長、学術研究協力部長、国際課長が管理運営の事務組織である。大学における組織図(資料 13)参照。

観点 11-1-2: 留学生センターの目的を達成するために、効果的な意思決定が行える組織となっているか。

(観点到に係わる状況)

留学生は教育を受けている外国人であるので、教育と国際性との二面性を有している。従って留学生センター長は、教育・学生担当理事と研究・国際貢献担当理と協議の上、管理運営事項を決定している。

(分析結果とその根拠理由)

留学生センターは所属教員を有する全学共同教育研究施設であり、留学生の日本語教育と生活支援及び日本人学生の海外派遣を主に担当している。学术交流協定の締結や国際交流に係わることは国際貢献推進室が担当する。国際課はその両方の組織の事務を担当する。国際貢献推進室と留学生センターの業務を明確にする必要がある。佐賀大学留学生センター規則（資料 1）、国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置要項（資料 14）参照。

観点 11-1-3: 学生、教員、事務職員等、そのほかの学外関係者のニーズを把握し、適切な形で管理運営に反映されているか。

（観点到係わる状況）

留学生センター運営委員会、人事選考委員会、佐賀地域留学生等交流推進協議会及びセンター教員会議で教員、事務組織、学外関係者からのニーズの把握がなされている。

（分析結果とその根拠理由）

留学生センター運営委員会は各学部から選出された運営委員（各 2 名、10 名）とセンター教員（14 名、日本語教育研究部門 6 名、英語教育部門 8 名（ネイティブ英語教員 5 名、併任 3 名）及び学部の留学生専門担当教員（4 名）、およびセンター長から構成されている。当運営委員会は管理運営について審議している。また、佐賀県地域留学生等交流推進協議会は県内大学等教育機関、佐賀県はじめ市町村、各種国際交流団体から構成され、留学生に関する意見を自由に聴くことができる。

観点 11-1-4: 省略

観点 11-1-5: 管理運営のための組織及び事務組織が十分に任務を果たすことができるよう、研修等、管理運営に係わる職員の資質の向上のための取り組みが組織的に行われているか。

（観点到係わる状況）

文部科学省などの通知にもとづいて大学で研修が実施されている。更に、日本学生支援機構あるいは各大学が開催する留学生の受け入れ等に係わる説明会や会議に教員及び事務職員は参加している。

基準 11-2 管理運営に関する方針が明確に定められ、各構成員の責務と権限が明確に示されていること。

基準 11-2-1: 管理運営に関する方針が明確に定められ、その方針に基づき、学内の諸規定

が整備されるとともに、管理運営に係わる役員の選考、採用に関する規定や方針、及び各構成員の責務と権限が文書として明確に示されているか。

(観点に係わる状況)

佐賀大学留学生センター規則に留学生センター長の責務が明示されている。更に、佐賀大学留学生センター長及び副センター選考規程により留学生センター長の選出方法が学内に周知されている。

(分析結果とその根拠理由)

佐賀大学留学生センター規則(資料 1)、佐賀大学留学生センター長及び副センター長選考規程(資料 15) 参照、

基準 11-2-2: 適切な意思決定を行うために使用される大学の目的、計画、活動状況に関するデータや情報が蓄積されているとともに、大学の構成員が必要に応じてアクセスできるようなシステムが構築され、機能しているか。

(観点に係わる状況)

留学生センターの目的、計画、活動状況に関する情報は留学生センターホームページに掲載されている。

(分析結果とその根拠理由)

留学生センターホームページ参照。留学生センターの業務は、「佐賀大学留学生センター紀要」(資料 3、4) に毎年年報として記載され報告されている。

基準 11-3 大学の目的を達成するために、大学の活動の総合的な状況に関する自己点検・評価がおこなわれ、その結果が公表されていること。

観点 11-3-1: 大学の活動の総合的な状況について、根拠となる資料やデータに基づいて、自己点検・評価(現状・問題点の把握、改善点の指摘等)を適切に実施できる体制が整備され、機能しているか。

(観点に係わる状況)

中期目標・計画を3ヶ月毎月に実施し、更に毎年まとめて実施している。

(分析結果とその根拠理由)

中期目標・計画に関して平成 16、17 年度では初期段階であったので「検討する」や「図

る」などの項目が多かったが、平成 18 年度以降は具体的な記述とした。

観点 11-3-2: 自己点検・評価の結果が大学内及び社会に対して広く公表されているか。

(観点に係わる状況)

教員の個人評価は平成 16～20 年度分を実施し、平成 16～20 年度の留学生センターの自己点検評価評価報告書は佐賀大学のホームページで公表されている。

(分析結果とその根拠理由)

佐賀大学ホームページ参照

観点 11-3-3: 自己点検・評価の結果について外部者(当該大学の教職員以外の者)によって検証する体制が整備され、実施されているか。

(観点に係わる状況)

平成 16 年度から外部者によって検証される体制が確立された。

(分析結果とその根拠理由)

平成 16 年度から毎年自己点検評価活動報告書の外部評価をそれぞれ、平成 18 年 12 月(佐賀大学元学長・佐古宣道氏、山口大学留学生センター長・宮崎保氏)、平成 20 年 1 月(佐賀大学元学長・佐古宣道氏)、平成 21 年 3 月(長崎大学副学長・小路武彦氏)、平成 22 年 3 月(佐賀大学元学長・佐古宣道氏)にそれぞれ受けた。平成 22 年度分も受ける計画である。

観点 11-3-4: 評価結果が、フィードバックされ、大学の目的の達成のための改善にむすびつけられるようなシステムが整備され、機能しているか。

(観点に係わる状況)

外部評価を受け改善するシステムはできている。

(分析結果とその根拠理由)

平成 16～20 年度の自己点検評価は外部者による評価を受け、その評価結果を一部フィードバックした。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

留学生センター運営委員会はネイティブ英語教員も含めて、留学生センターの運営・企画・人事等を審議し決定し、その結果は留学生センター教員、各学部の委員、事務職員に周知している。更に、議事録は各学部の委員を通して学部構成員に配信され公表されている。

(改善を要する点)

交流協定締結は殆ど国際貢献推進室によって進められ、交流協定の状況は、留学生センターへは後日連絡にとどまっている。留学生センターは、在学中の留学生の日本語教育と生活の指導にとどまらず、これからは国際的な視野を見据えた留学生教育や日本人学生の派遣に重くをおくべきと思うので、種々の国際交流に関する事業の応募や概算要求事項、学長裁量経費申請などでにおいて、留学生センターと国際貢献推進室（研究・国際貢献担当理事）とが協力する必要がある。

(3) 基準 11 の自己評価の概要

法人化後、留学生センターの運営は留学生センター運営委員会で審議決定されるので、決定事項などは学内に十分公表される組織である。留学生センターにかかわる組織は学長、理事（研究・国際貢献担当理事、教育・学生担当理事）、国際貢献推進室長、留学生センター長の系列のほか、留学生センター及び留学生に係わる事務組織は両理事、学術研究協力部長、国際課長の系列となっている。縦の系統以外の横の学務部長（学務部）と学術研究協力部長、教務課長と国際課長との連携を十分に維持する必要がある。留学生センターの活動はセンターニュースや留学生報告などで公表し、更には地元新聞による報道で学内外に知られるようになった。また、外部評価を受け改善に役立てることができた。

留学生センターは国際性を帯びた学生の教育であるが、外国での協定締結や交流促進は国際貢献担当理事と国際貢献推進室が実施し、それに基づく留学生教育とその対応は教育担当理事と留学生センター長が担うようになっている。国際交流が協定の締結だけに終わらず、実質的な外国人留学生の受け入れ・教育と日本人学生の海外派遣による国際的人材の育成によって、大学の根幹である「学生教育」を主とした国際化を一層推進する必要がある。

イ その他組織運営に関する事項 基準 2 教育研究組織（実施体制）

(1) 観点ごとの分析

基準 2-1 大学の教育研究に係わる基本的な組織構成（学部及び学科、研究科及びその専攻、その他の組織並びに教養教育の実施体制）が大学の目的に照らして適切なものであること。

観点 2-1-1 ～ 観点 2-1-6 省略

観点 2-1-7：全学的なセンターなどを設置している場合には、その構成が教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっているか。

（観点到係わる状況）

留学生センターの設置目的に照らして留学生のための、①日本語教育、②修学及び生活相談、③地域社会との交流、④日本人学生のための海外留学支援、⑤帰国留学生のフォローアップ等を促進するために、平成 21 年度は 7 名の日本語専任教員が配置されている。更に、日本人学生の英語力を向上させ、外国留学するために必要な英語力をつけさせるために、5 名のネイティブ英語教員を学内運用定員で 3 年の期限付きで採用し英語教育部門を平成 18 年度に設けた。平成 20 年度末からは、佐賀大学における英語教育のさらなる展開を図るべくネイティブ英語教員を高等教育開発センターに配置換えし、留学生センターの併任教員とした。日本語教育研究部門では、全学教養教育、日本語研修コース、短期プログラム、総合コース及び日本語教員養成コースの授業を担い、全学の留学生の日本語修得に貢献している。英語教育部門では、全学教養教育のほか、留学のための英語教育（TOFEL や TOIEC スコアアップ講義）を行っている。

（分析結果とその根拠理由）

留学生のスピーチ報告会などを見ると、短期間に日本語能力が向上していることが分かり、留学生センターの日本語教育は効果的に実施されていると判断される。また、日本人の英語力の向上も著しい。

留学生センターの構成と業務については佐賀大学留学生センター留学生教育研究部門（資料 16）参照。

基準 2-2 教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能されていること。

観点 2-2-1：教授会が、教育活動に係わる重要事項を審議するために必要な活動を行っているか。

(観点に係わる状況)

留学生センターでは教授会に代わる留学生センター運営委員会で、教員人事、年度計画、カリキュラム及び留学生の成績評価について審議され決定される。

(分析結果とその根拠理由)

留学生センター運営委員会の審議事項と報告事項は全て議事録としてまとめられ、全学部の委員をとおしてそれぞれの学部へ周知されている。

観点 2-2-2: 教育課程や教育方法などを検討する教務委員会などの組織が適切な構成となっているか。また、必要な回数の会議を開催し、実質的な検討が行われているか。

(観点に係わる状況)

留学生センターは教員数が少ないので学部の教務委員会に相当する組織はない。しかし、各教育プログラムのコース毎に担当のコーディネーターを決め、コーディネーターを中心にカリキュラムや年次計画が作られる。その結果を運営委員会で説明・審議し、承認を得ている。

(分析結果とその根拠理由)

多くの場合、教務委員会がなくても担当コーディネーターを中心にして議論されている。その結果は必要に応じて運営委員会に諮る前に教員会議を開催し議論している。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

留学生センター運営委員会で審議され、決定されるので客観的な判断のもとでカリキュラムや年次計画が立案されている。

(改善を要する点)

教務委員会に代わるものがないので、全て運営委員会で詳細に審議しなければならない。教務委員会に代わる小さな組織の設置の可能性について検討する必要がある。

(3) 基準 2 の自己評価の概要

留学生センターは平成 18 年度に、英語教育部門が設置されたことに伴い、日本語研究教育部門と英語教育部門の 2 部門により組織されている。日本語研究教育部門は全学の外国

人のための日本語教育と生活指導が主たる業務あり、全ての教員が日本語教育の専門家であるので、留学生は短期間で著しく日本語能力を向上させることができる。他方、英語教育部門ではネイティブ教員が選択科目として英語教育を担当している。受講生の高い意欲もあって日本人学生の英語力は確かに向上している。しかし、海外派遣日本人学生は留学生受入数に比べると10%弱であるのでその強化策が必要である。

平成18年度11月から、留学生センター長がオブザーバーとして全学の教育委員会に参加することになったため、全学的な教育制度を取り入れた留学生教育が可能となった。

留学生センターの日本語教員は平成18年度に1名退職者不補充となった。しかし、平成21年度からは、文化教育学部日本語教員養成のための講義4科目担当、留学生増に伴う日本語の講義の強化、日本人学生の海外派遣の強化のために留学生センター教員の増が図られる予定である。

4. その他

(2) 平成 20 度の外部評価

平成 22 年 3 月、元佐賀大学長 佐古宣道氏に、平成 20 年度の留学生センターの自己点検評価報告書の外部評価を受けた。以下に、評価をまとめた。

(佐賀大学留学生センターの優れた点)

- ・留学生教育研究部門のカリキュラムは、「研修コース」「SPACE」「総合コース」ときめ細かい充実したプログラムとなっている。
- ・NPO 法人国際下宿屋は、留学生の宿舎確保のために、他の大学にない発想で評価できる仕組みである。

(佐賀大学留学生センターにこれから期待する点)

- ・機能的分化、個性を発揮し、特色ある佐賀大学留学生センターを目指してほしい。
- ・卒業生とのネットワークの構築により、質の高い留学生の確保をする。
- ・留学生教育研究部門のカリキュラムについて、日常会話の他に専門分野及び教養教育を充実させるために、各学部の教員との連携を図ること。
- ・HP 等を英語の他に中国語、韓国語で作成できれば、他の大学にない佐賀大学の特徴となりえる。
- ・留学生教育部門と英語教育部門が、合同で教員会議を開催したり、紀要を一緒に出版するなど、共通の課題を見つけ出すのも、これからの留学生センターの発展につながるのではないか。

添付資料一覧

- ・ 佐賀大学留学生センター規則（資料 1）
- ・ 佐賀大学留学生センター紀要第 8 号（資料 3）
- ・ 佐賀大学留学生センター紀要第 9 号（資料 4）
- ・ チューターの手引き（資料 5）
- ・ 佐賀地域の留学生に係る生活実態調査報告書（資料 6）
- ・ 平成 21 年度春季外国人留学生オリエンテーション（資料 7）
- ・ 平成 21 年度秋季外国人留学生オリエンテーション（資料 8）
- ・ 国際交流会館入居者選考基準（資料 9）
- ・ 平成 21 年度佐賀大学寄宿舍（楠葉寮）入寮者募集要項（資料 10）
- ・ NPO 法人国際下宿屋宿舎一覧（資料 11）
- ・ 第 5 回学生国際交流シンポジウム報告集（資料 12）
- ・ 大学における組織図（資料 13）
- ・ 国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置要項（資料 14）
- ・ 佐賀大学留学生センター長及び副センター長選考規程（資料 15）
- ・ 佐賀大学留学生センター留学生教育研究部門（資料 16）
- ・ 08-秋—09 春学期 佐賀大学短期留学プログラム（SPACE）報告（資料 17）

平成21年度

ネイティブ・インストラクターによる
英語教育の成果報告書

目 次

概要 2009	1
授業科目	3
時間割	6
授業アンケート結果		
授業アンケート	8
集計結果	10
学生のコメント	15
授業の成果	22
留学する学生の受講状況	22
海外語学研修	
社会貢献	27
今後の課題	27

概要 2009 年度

留学生センター 副センター長
英語教育部門
早瀬 博範

2006年度に「英語ネイティブ教員による英語運用力強化」事業として、新規に英語のネイティブ・インストラクター5名を採用し、半期50コマの授業を開講し、学生の英語コミュニケーション能力の強化に努めてきた。昨年度は、当初留学生センターで採用の際に設定した3年間の任期終了に伴い、3年間の5名の教員の教育成果を検証・評価し、事業の総括を行った。

その結果、5名すべての教育成果を高く評価し、事業に新たに「カリキュラムと教材の開発」という内容を加え、第2期は高等教育開発センターの教員として新規採用し、本事業を継続発展させることにした。彼らの所属は高等教育開発センターになったが、授業の実施は、これまでと同様、留学生センターの英語教育部門で継続して行うこととし、教員は全員、留学生センターの併任教員とした。本報告書では、留学センターで企画実施した授業を中心に彼らの教育活動を報告する。

事業に「カリキュラムと教材の開発」が追加されても、彼らの授業の方針は、検証の結果からも変更の必要がないことが確認され、これまで同様に行うこととした。授業の基本方針は、以下の3点である。

- (1) 少人数教育 (1クラスの受講生10人から16名以下)
- (2) プレイメントテストによる習熟度別クラス編成
- (3) コミュニケーション能力の育成強化に特化

しかし、大きな変更点がある。授業内容が今年度から、昨年度までとは異なる方式で実施するようになった。昨年度までは、ネイティブ教員の実施する授業の約半分(半期約25コマ)をアカデミックな英語能力の育成と留学目的のためのコースとして、オプションとして開講しており、学生のニーズに合わせて受講できるようにしていた。しかしながら、多くの学生から、「ぜひ単位化を」という強い要望があり、また法人サイドからも「単位化への改善」を要請され、今年度から、オプションとして開講していた半期25コマの約9割を学部・大学院の授業として開講することで、単位化を実現した。それでも、留学を目的とした授業等は、留学生センター開講の授業として、単位化せずに残すこととした。

今年度は新しい組み合わせでの授業展開となるが、オプションが激減したことによる学生のニーズへの対応、高度な英語力の強化という新たな課題が出てきたことは、今後本事業をどのような方向へ持っていくかの検討をせざる段階にも来ていることを示している。

それでも、ネイティブ教員のクラスは、教養教育の「英語」として、新入生の約6割が受講を希望しており、学生のニーズは高い。運よく受講が認められた学生たちは、英語だけの授業に緊張しながらも、教員の授業技術のうまさ

徐々に慣れ、多くの学生が最後は上達の実感し、英語習得への意欲を高めている。本授業のおかげで留学を達成できたという学生も出てきていて、本事業の成果は着実に表れている。

授業科目 2009

ネイティブ・インストラクターによる授業は、2009年度から大きく次の3つに分かれて実施されている。5人合計で、半期約50コマ実施している。

<教養教育英語必修科目>

教養教育機構で、必修単位として開講されている。1科目1単位。現在は、1年生用として開講。受講希望者に対し、プレースメントテストによりレベル分けをおこない、各クラス16名以下の少人数クラスである。授業の内容と目的は以下の通りである。

[注] ただし、医学部の場合は、これまで医学部独自のカリキュラムが決められていることから、上記のルールは、適応せず、1年生全員の受講で、プレースメントテストも行わないで開講した。その結果、少人数制も実施できていない。

○「アクティブ・イングリッシュ I (=Active English I)」

高校までの基礎的な能力を基盤にして、英語でコミュニケーションを行うために必要な基礎的な単語や表現を取得し、それらを実際に使用できるレベルまで高めるためのトレーニングを行う。4技能の中でも、特にリスニングとスピーキング技能を強化させる。

○「アクティブ・イングリッシュ II (=Active English II)」

AE I で得た能力を基盤として、より実践的なコミュニケーション能力を習得することを目的とする。異文化交流の場面で生じるさまざまな社会的・文化的テーマを取り上げ、自己表現・意思伝達のための技能をトレーニングする。リーディング、ライティング、スピーキング、リスニングの4技能の基礎的な能力がバランスよく育成されるようにする。すべての学生がTOEIC 400点レベルを目指す。

○「アクティブ・イングリッシュ III (=Active English III)」

AE II までに得た能力を基盤として、実践的なコミュニケーション能力を習得することを目的とする。スピーチやディスカッションなどの実践的なトレーニングを行う。4技能のバランスの良い育成と強化を図る。すべての学生が、TOEIC 450点レベルを目指す。

<学部・大学院選択科目>

2009年度から新たに実施したもので、全学部で実施されている。大学院レベルとしては、工学系研究科で実施している。学部・大学院の授業なので、アカデミックな英語(English for Academic Purposes)の育成を目指す。

各学部・大学院の授業内容に応じて、以下のような授業が設定されている。すべて各学部大学院において、単位化されている。

○文化教育学部：

「**実践英語(=Practical English)**」

専門課程で必要になる英語での論文作成や口頭発表の基礎的な技術を育成を目指す。

「**専門教育外国語(=English in Special Course)**」

各専門分野に特化して英語による論文作成や口頭発表の実践的訓練を行う。

○経済学部：

「**アカデミック・スピーキング (=Academic Speaking)**」

英語による学会発表やディスカッションに必要な英語力を強化するための授業。ディベートなどを取り入れ、口頭発表に必要な基本的な表現法や応答の仕方などを通して、英語によるスピーチコミュニケーション能力を身につけさせる。

「**アカデミック・ライティング (=Academic Writing)**」

英語によるレポートや論文作成の実践的な演習。実際にレポートや論文を作成し、添削指導などによって、論文の書き方を習得する。

「**TOEIC スコア・アップ (=TOEIC SCORE-UP)**」

TOEIC テストのスコア・アップのための対策講座。

○ 農学部

「**アカデミック英語コミュニケーション (=Academic English Communication)**」

専門分野に関連した内容について英語での発表やディスカッション能力の育成を目指す。

「**アカデミック英語プレゼンテーション(=Academic English Presentation)**」

専門分野に関連した話題について英語のプレゼンテーション能力の育成を目指す。

○ 工学系研究科

「**科学英語特論 (Advanced Study of Scientific English)**」

大学院の学生の論文執筆、学会等でのプレゼンテーション能力を実践的に訓練する。

<選択科目>

学生のニーズに合わせて、ネイティブ・スピーカーによる以下の授業科目を開講する。前述の学部・大学院授業と同様に、アカデミックな英語の育成を目指す。学生のニーズ、特に留学目的の学生のための授業として設定している。

教養教育機構の単位数とは無関係に履修できるが、各授業担当教員が設定している受講基準を満たさなければならない。これらのクラスは、教職員にも開放し、FDとして役立てられている。

なお、特に医学部の学生の便宜を考え、夏期集中の講座としても一部開講した。

○ 「アカデミック・ライティング I (=Academic Writing I)」

大学でのレポートや論文作成に必要なライティングの能力を高めるための基盤となる授業。英語で論文が書けるように、まず、論理的な思考法や論構成、論文特有の表現など、論文作成の基礎的な内容について講義する。1クラスの人数を15名程度に制限する。

○ 「アカデミック・ライティング II (=Academic Writing II)」

英語によるレポートや論文作成の実践的な演習。

実際にレポートや論文を作成し、添削指導などによって、論文の書き方を習得する。1クラスの人数を10名程度に制限する。

○ 「TOEFL ストラテジー」 (=TOEFL Strategy)」

TOEFL のスコア・アップのための攻略講座。TOEFL の出題形式に合わせて、リスニング、文法力、読解力を強化するための訓練をおこない、留学に必要な550点を目指す。1クラスの人数を20名程度に制限する。

○ 「TOEIC スコア・アップ」 (=TOEIC SCORE-UP)」

TOEIC のスコア・アップのための対策講座。TOEIC の出題形式に合わせて、リスニング、文法力、読解力を強化するための訓練をおこない、各学生がTOEICにおいて100点アップを目指す。1クラスの人数を20名程度に制限する。

○ 留学準備(Study Abroad: Living Skills)

海外留学に必要な英語力に習得と、授業の受講の仕方、生活の仕方などに

についての基本的な知識を身につけ、留学を成功に導くための準備のための実践的な授業。

○ 「海外英語研修」

一ヶ月の海外での語学研修を含んだ授業で、語学学校での研修とホームステイをとおして、海外での生活に必要な英語力と文化的な知識を実践的に身につけることを目的とする。日本での事前・事後の授業をおこなう。プログラム修了者には、教養教育の単位2単位が与えられる。

具体的には次の2つのプログラムを実施している。

「**パシフィック大学ホームステイ・プログラム(=Pacific University Homestay Program)**」

米国オレゴン州パシフィック大学での1ヶ月の語学研修

「**ラトロブ大学ホームステイ・プログラム(La Trobe Homestay Program)**」

オーストラリア、メルボルンのラトロブ大学での1か月の語学研修。

○ 「フード・カルチャー」(Culture in Food)

英語圏の文化を比較する。特にその国の食物に注目して、そこからそれぞれの国の歴史や文化を探る。

学生による授業評価アンケート結果 2009（抜粋）

他の授業同様、ネイティブ教員の全ての授業において、授業アンケートをとっている。プログラムが始まって3年間は、独自にアンケートを作成し評価を行っていたが、4年目からは、他の授業と同じ一般の「学生による授業評価アンケート」を使用している。

ここに抜粋し掲載したデータは、ネイティブ教員の行った全ての授業を対象として、授業評価に直接繋がる以下の6項目に関する平均点である。満点は5点である。

<評価項目>

- ① この授業の内容は理解できる。 <B-1>
- ② この科目を受講してみて、内容への興味が増してきた。 <B-2>
- ③ 教材は分かりやすかった。 <B-4>
- ④ 授業を分かりやすくする工夫が感じられた。 <C-1>
- ⑤ 学生の質問に適切に対応してくれている。 <C-2>
- ⑥ この授業を受講して満足が得られた。 <D-1>

この結果より、ネイティブ教員の授業は、すべての授業において、しかもすべての項目において4点以上の数値を出しており、学生にとってその授業は十分理解でき、かつ満足のいくものであったことが示されている。

さらに、この数値をより客観的に判断するための一つの方法として、大学全体の授業評価データの平均値と比べてみた。その数値は、各学期の最後に **Average** として示している。この点でも、ネイティブ教員の授業は、すべての項目において、全体平均を大きく超えており、ネイティブ教員の授業が他の授業と比べても、学生にとっての好ましいものであることがわかる。

授業アンケート結果(抜粋)
2009前期

授業	人数	①(B-1)	②(B-2)	③(B-4)	④(C-1)	⑤(C-2)	⑥(D-1)
S1	13	3.778	4	3.889	4	4.333	4
S2	20	3.824	3.941	3.824	3.882	4	3.875
S3	15	3	3.538	3.308	3.75	3.692	3.833
S4	18	3.545	3.636	3.727	3.818	3.9	3.636
S5	15	3.583	3.75	3.833	3.667	4.083	3.909
S6	13	4	4.111	4	4.444	4.444	4.375
S7	15	4.125	4.25	4.125	4.5	4.625	4.5
M1	18	4.143	3.929	3.857	4.077		4.143
M2	12	4.222	4.333	4.222	4.444	4.556	4.5
M3	10	4.125	4.375	4.125	4.25	4.25	4.25
M4	18	4.2	4.4	3.867	4.267	4.5	4.462
M5	20	4	4.412	4.235	4.294	4.588	4.353
M6	5	4	4.75	4.5	4.5	4.5	4.333
M7	10	4	4.2	4.2	4	4	4.25
M8	15	4.067	4.267	4	4.333	4.467	4.133
M9	20	3.643	3.429	3.615	3.786	3.786	3.5
B1	18	4.188	4.438	4.0188	4.5	4.5	4.438
B2	10	3.667	3.778	4	4.222	4.333	4
B3	15	4.182	4.364	4.455	4.545	4.545	4.545
B4	20	4.063	4	4.063	4.138	4.438	4.438
B5	17	4.077	4.308	4	4.308	4.308	4.462
B6	9	4.556	4.778	4.556	4.444	4.778	4.444
B7	4	4.25	4.5	4.25	4.5	4.75	4.5
A1	12	4.444	4.444	4.111	4.222	4.333	4.333
A2	20	4	4.176	4.176	3.824	4	4.125
A3	18	4.083	4.417	4.083	4.25	4.417	4.5
A4	18	3.8	3.267	3.533	4	3.786	3.714
A5	15	3.667	3.667	3.75	4	4	4.182
A6	7	3.6	4.4	4.2	4	4	4
A7	10	3.833	4	4.333	4.5	4.167	4.2
A8	17	3.933	4	4.067	4.267	4.533	4.385
F1	10	4.333	4.556	4.333	3.889	3.889	4.556
F2	18	4.313	4.5	4.313	4.313	4.563	4.625
F3	15	4	4.167	3.917	4.167	4.083	4.167
F4	20	4.2	4.4	4	4.267	4.467	4.6
F5	18	3.813	3.875	3.813	4.188	4.25	4.125
F6	17	4.071	4.286	4.071	4.5	4.786	4.571
F7	5	4.333	4.667	4	4.667	5	5
F8	12	4.182	4.636	4.545	4.727	4.727	4.727
SUB	562	3.9959744	4.1780769	4.0490974	4.2166667	4.2147949	4.2740769
Average		3.636	3.577	3.497	3.651	3.793	3.656

授業アンケート結果(抜粋)
2009後学期

授業	人数	①(B-1)	②(B-2)	③(B-4)	④(C-1)	⑤(C-2)	⑥(D-1)
S1	19	4	4.063	3.938	4.063	4.188	4.067
S2	17	3.4	4.1	3.5	4.1	3.667	3.667
S3	17	3.767	4	3.769	3.917	4.083	4
S4	13	3.7	3.6	3.9	3.9	4.1	4
S5	3	3.661	3.628	3.609	3.721	3.817	3.748
S6	11	3.333	3.833	3.667	4.333	3.833	4
S7	8	3.75	4.5	4.5	4.75	4.75	5
M1	9	4.25	3.75	4.25	4	4.25	3.75
M2	12	3.875	4	3.875	4.25	4.375	4.25
M3	10	4.143	3.857	3.857	4.286	4.429	3.571
M4	18	4.231	4.538	4.231	4.462	4.385	4.385
M5	12	4.1	4.2	4.2	4.7	4.7	4.4
M6	7	4	5	4.5	4.5	4.5	5
M7	7	4.333	4.333	4	4.667	4.667	4.667
M8	3	4	5	5	5	5	5
B1	12	4	3.889	3.875	4.375	4.25	4.333
B2	15	4.154	4.462	4.308	4.385	4.538	4.5
B3	18	4.214	4.429	4.429	4.429	4.5	4.571
B4	18	4	4.067	4	4.2	4.2	4.214
B5	18	4.143	4.143	4.143	4.214	4.429	4.455
B6	15	3.833	3.917	4	4.333	4.25	4
B7	7	4.25	4.75	4.25	4.75	5	5
A1	14	4	4.091	4	4	4.091	4.1
A2	15	3.75	3.75	3.833	3.833	4.167	4
A3	13	4.3	4.6	4.5	4.5	4.556	4.5
A4	20	4	4.143	4.143	3.786	4.071	4.071
A5	17	3.667	3.917	3.833	4	4.25	4.182
A6	10	3.2	4	2.8	3.8	4.2	3.4
A7	11	4.25	4.375	4.25	4.75	4.75	4.333
F1	16	4.333	4.417	4.167	4.333	4.417	4.5
F2	20	4.286	4.286	4.143	4.571	4.571	4.571
F3	15	4.455	4.818	3.909	4.636	4.455	4.455
F4	12	4.222	4.444	4.444	4.444	4.444	4.333
F5	19	4.063	4	3.875	4.063	4.063	4.375
F6	14	4	3.727	4	4.273	4.545	4
F7	10	3.833	4.4	4.5	4	4.167	4.667
F8	11	4.333	4.5	4.333	4.5	4.5	4.5
F9	10	4	4.143	4.286	4.286	4.571	4.286
SUB	496	3.9955	4.201842	4.074132	4.292368	4.361289	4.285553
Average		3.706	3.664	3.584	3.741	3.852	3.744

授業に関する学生のコメント 2009

以下は、授業アンケートに自由記述された学生のコメントです。

(英語の間違いもそのままにしてあります。)

- This course was very interesting.
- This class was very useful for me. I became interested in English more than before.
- Thank you very much. This class was very interesting and exciting. Also I can read English articles few. Good luck!
- Presentation is very helpful for my English skills. The teacher is very friendly, so I'm very happy.
- Thank you very much. I enjoyed this class. See you again.
- Native English class was very fun.
- Interesting and I like it.
- Interesting.
- Too fun. I like this class.
- I hope to continue this class next year.
- I love English.
- The teacher is very well to teach English, so I can improve my English skill. And the class is very interesting.
- This class was very exciting, and I found Presentation was uneasy; however, I thought I would develop than last time. I want to continue this class.
- Thank you. This class let me learn more English. I'll learn English forever.
- I enjoyed this class. I could improve the level of my English communication skill. Thank you very much.
- Actually, I don't like English really, but this class is fun. I became to like English a little.
- This class was very enjoyable for me. And this class members were very friendly.
- I appreciate to level up my English skill.
- Thank you for teaching me. See you again in October.
- I think my English ability(speaking, writing, etc) is higher than at the

beginning. I'm happy that I can join this class. Thank you very much.

- This class is very fun and native-speakers English is very useful for listening skill up.
- I think this course is helpful for students.
- This class helps me a lot for improving my writing English skill.
- Thanks to teach English. I have interesting English.
- Thank you. Good classmate and good teacher. I want to be high-level speaker.
- I think my English skill is up! Class is very interesting.
- It was difficult for me to speak English, but I could brush up my English. I want to learn English more.
- Thank you for your lessons. I have took lessons two years. I think my skill of English level up. I want to more level up.
- Thank you for teaching many things for me! Speaking English and communicating each other is very interesting for me. I like English very much.
- I'm glad to speak English. I like English. I want to speak English more in the future. Thank you.
- The teacher is a very good teacher. Thank you very much. This class is interesting.
- I could learn a method of presentation through speaking, writing and reading.
- Through this class, I got the skill of theoretical writing. Thank you very much.
- It was good that we can use video player and research some information with Internet.
- I was satisfied with this class, thank you.
- I can't speak English, but class is very interesting. Thank you for teaching very kind.
- I'm very interested in this class and World Heritage Sites. Thank you for teaching me.

- 今まで発音とか気にしていなかったけれど、とても難しいことに気がついた。
th を上手に発音できるようになりたい。
- It was interesting to play English game. I wanted to play more.
- I like this class. Lessons are fun. I could have new friends. It is important to communicate with many people. I am satisfied with this class. The English speech is very useful for me. Thank you very much.
- I would like to take up a positive attitude. I will be able to speak native English.
- I think vocal exercise is good.
- I'm more interested in English. Practices in pronunciation is very useful for us.
- I want to sing a song everyone.
- I want to hear Back Street Boy's songs.
- 発音も文法もめちゃくちゃですみません。
- It is very interesting. I enjoy this class!
- 使う教材が楽しくて毎回授業が楽しかったです。質問にも丁寧に答えてくださってありがとうございました。授業によく遅れてすみませんでした。
- You are a gentle man. I like pronunciation practice.
- 普段英語に触れていない分、英語のみの授業を受けて初めは戸惑いましたが、とてもためになりました。
- I could enjoy this class! Thank you . 忙しくないときにこの授業を受けたかったです。
- 今まで外国人と触れ合う機会がなかったので、よい経験になった。英語を勉強しなければと痛感するよい機会となった。
- 学部の英語とは違い、意欲的に取り組むことができた。このクラスを受けてよかったと思えた。
- Especially pronunciation practice was really helpful for me.
- I want to speak English well.
- I try to improve English.
- 話が半分くらいしか理解できないのが悔しい。でもずいぶん分かるようになったけれども。これからもよろしくお願いします。
- 課題が多いのが大変だったけれど、ネイティブのクラスはとてもよかったと思

います。

-This class is interesting for me to study. I like the best this class in all classes.

-とても楽しい。

-Homework is too much...

-授業の内容はレベルが高く自分には少し難しかったけれど、生の英語に触れるので、楽しかったし、有意義でした。

-I think that my pronunciation is improved than it was, and I have to study English hard.

-I always enjoy this class!

-Please teach me good songs.

-I want to sing songs with everyone.

-English is interesting. I want to study languages.

-I want to watch a movie in English!

-When we discuss in this class, I hope that you join. I wanted to speak to you more.

-I want to sing songs in English.

-毎週宿題をするのに苦戦している。

-This class is high level.

-I did not know how to write English report. Before I attend this class, so I think it's good!

-

学生のコメントのまとめ 2009

1. Enjoy, interesting, fun、そして、useful, helpful というという表現が多く見られるように、多くの学生が授業を楽しみ、しかもその結果、役に立ったと高く評価している。
2. 少人数クラスであることが、大きなクラスのメリットである。
3. ネイティブの授業ということで、「難しい」という感想もあるが、教員に対しては、多くの学生がフレンドリーで丁寧であるという評価をしているので、授業にもついていき、授業を通して「上達」を実感できている。
4. ほとんどの学生が、英語に触れる機会が増え、英語を勉強する時間が増えたとコメントしている。
7. 宿題の多さを多くの学生が指摘しているが、結果的に良かったと評価している。

ACTIVE ENGLISH 2009

L-IMP=聴解上昇率(%) R-IMP=読解上昇率(%) W-IMP=作文上昇率(%) S-IMP=会話上昇率 G-IMP=総合上昇率(%)

Active English 後期																	
Class#	Stud's	Pre-L	Post_L	L-IMP	Pre-R	Post-R	R-IMP	Pre-W	Post_W	W-IMP	Pre-S	Post_S	S-IMP	Pre-G	Post_G	G-IMP	
S1	13	15.4	17.0	10.5	13.9	15.1	8.6	9.2	13.8	50.0	17.2	25.5	48.3	55.8	71.5	28.1	
S2	10	13.5	16.1	19.3	11.1	13.8	24.3	6.8	11.6	70.6	19.5	25	28.2	50.9	66.5	30.7	
S3	14	14.2	16.4	15.8	11.9	14.8	23.9	9.3	15.0	61.2	16.7	27.6	65.4	52.1	73.8	41.7	
S4	13	10.5	11.6	10.2	6.9	9.0	30.0	4.8	7.7	61.3	9.6	15.8	64.0	31.8	44.1	38.4	
S5	30	11.0	14.5	31.1	7.9	11.7	48.3	4.5	10.9	140.4	*	*	*	23.4	37.0	58.0	
F1	16							38	85	124	41	87	112	25	29	16	
F2	13							34	88	159	23	69	200	20	26	24	
F3	9							46	108	139	34	73	115	25	32	28	
F4	17							71	121	70	39	122	212	26	33	28	
F5	16							52	84	62	29	69	138	24	30	24	
M1	14							50.9	116.3	128	30.4	72.2	138				
M2	9							42	110.6	163	32.4	75.5	133				
M4	10							40.9	110.7	171	30.6	72.7	138				
M5	17							60.8	122.8	110	31.5	74.2	136				
B1	14													23	26.5	15	
B2	9													21.8	22.6	4	
B3	13													26.1	26.2	0.3	
B4	15													25.3	26	2.8	
B5	15													24.6	23.9	-2.8	
A1	31	14	16	14	11	12	9	60	70	17							
A2	5	15	16	6	12	13	8	66	77	17							
A3	12	11	12	9	8	12	50	56	66	18							
A4	10	16	17	6	14	15	7	52	79	52							
A5	17	14	15	7	11	14	27	57	80	40							
A6	14	13	17	31	11	15	36	64	77	20							

社会貢献（2009年度分）

以下の地域及び学内の事業に対して、英語教育部門の全員が参加協力し、指導助言を行っている。

2009年

- 8月 佐賀県中学校英語部会主催による「佐賀県中学校英語ディベート・コンテスト」
講習会での講師および審査員
- 10月 佐賀県高校英語部会主催による「佐賀県高校英語スピーチ・コンテスト」審査員
- 11月 佐賀県高校英語部会主催による「佐賀県高校英語ディベート・コンテスト」審査員

2010年

- 1月 佐賀大学地域貢献事業「佐賀大学杯高校生ディベート選手権大会（英語部門）」審査員

今後の課題 2009

1. システマティックな履修方法の整備
→統一教科書の作成・導入
2. プレースメントテストの充実と実施方法の効率化
→ウィブを活用した実施を検討
3. 医学部のカリキュラムの特殊性
→本庄キャンパスで実施している方法での統一化
4. 少人数授業に適した教室の整備
5. アシスタント（補佐事務員）の必要性
6. 日本人の英語教員との協働
7. ネイティブ教員による高度な英語力育成授業のオプション化
ネイティブ授業の約9割を単位化し各学部に分配したことにより、学生が自らの目的で受講できる選択授業のコマ数が減少したことによる。

国立大学法人佐賀大学部局等評価検証結果報告書

部局等の名称 留学生センター
部局等評価の実施時期 平成22年9月

1. 評価手法

当該部局から提出された評価手法に関する資料に基づき部局等評価の評価手法について検証した結果、

○評価手法は適切であった。

- ・評価手法には改善すべき点があった。(具体的な内容は別紙1)

2. 評価基準

当該部局から提出された評価基準に関する資料に基づき部局等評価の評価基準について検証した結果、

○評価基準は適切であった。

- ・評価基準には改善すべき点があった。(具体的な内容は別紙2)

3. 評価の妥当性

当該部局から提出された自己点検・評価報告書に基づき部局等評価の妥当性について検証した結果、

○評価は評価基準に照らして妥当である。

- ・評価は評価基準に照らして妥当でない点があった。(具体的な内容は別紙3)

国立大学法人佐賀大学大学評価の実施に関する規則第3条第2項に定める検証を行い、上記のような結果が得られた。別紙に所感と付記し、

平成23年2月19日

検証者 氏名 佐古亨道 印



別紙

佐賀大学留学生センター自己点検報告書―平成21年度―について、平成23年2月7日に佐賀大学で面談による質疑応答により外部評価を実施しました。

評価手法、評価基準、評価の妥当性については、評価検証結果報告書に記載したとおりですが、下記のような所感を付記しますので、ご高覧下さるようお願いします。

記

佐賀大学留学生センターは、平成12年4月文科省省令施設として設置されて以降、留学生教育研究部門と英語教育部門から構成される組織として、順調に発展してきたと評価されます。2つの部門はそれぞれの設置の目的に準じた各種のコースや多様な科目を設けて、カリキュラムの充実を図りながら、関係教職員が教育効果を高める努力を継続していることも特に印象深いものがあります。佐賀大学国際戦略構想により、留学生センターは国際交流センター（仮称）への組織替え案が進行しているようですが、この2つの部門の佐賀大学内での教育の重みは一層高まりますので、留学生センター長始め教職員の皆さんが今後とも課せられた役割に真摯に取り組んで頂きますよう期待します。

- 1) 日本語コースや日本語科目のカリキュラムなどの見直しにより、日本語教育システムを改善し、教育内容の充実を図っていることを評価します。今後、その教育効果などを十分に見極めることが肝要です。
- 2) 協定大学などの日本語教師を対象にする高度なブラッシュアッププログラムを新たに設置できないでしょうか。過去に具体的な要望がありました。
- 3) 留学生センターのホームページ（HP）の充実により学生諸君への情報提供が一段と拡充されたことは、当センターの広報活動の活発化を図ったことにも繋がり、評価されます。HPの管理や更新に係る労力の軽減を要するとの指摘もありますが、周知すべき情報については遅滞なくHP上で提供されるよう要望します。
また、HPの対応言語を4カ国語にする準備を進めているとのことでしたが、是非とも実現するよう要望します。
- 4) 帰国留学生へのフォローアップは必ずしも十分であるとは言えませんので、学部との連携を密にして全学レベルで今後とも充実を図るべきです。また、協定大学の協力を得て拠点となるサテライト室の設置、同窓会の主導によって各国での同窓会組織の立ち上げなどは、引き続いて優秀な留学生を確保するにも、有効な方策となります。実質的な進展を希望します。
- 5) 留学生用宿舎の確保が進んでいることは評価されます。今後とも質の良い宿舎の整備プランを関係部署との連携により進めて頂くよう要望します。

- 6) 留学生及び日本人学生が気軽に交流できる留学生交流室の設置については評価できます。一方、留学生の心のケアが求められているケースが見受けられます。このことは、留学生の生活支援の一つとして見逃せない要件になりつつありますので、保健管理センターとの密接な連携を深めて適切に対応して頂くよう求めます。
- 7) 報告書の16ページには、農学部が学部の教員と研究リストをSPACEの応募者にも閲覧可能した結果、優秀な学生の応募者が増えたとの記述があります。今後は全学の教員と研究リストなどを公開すべきでしょう。
- 8) 外国大学との学術交流協定の締結では、学部間では具体的な交流内容などを取り決めた覚書を取り交し、同時に大学間協定を締結すべきでしょう。
- 9) ネイティブ教員による英語授業のアンケートの結果を見ると、学生の評価も高いので、今後、授業コマのさらなる増加などにより学生のスピーキング、ヒアリングの英語力を高めていくべきです。このことは、就職可能な企業を増やすことや日本人学生の少ない留学志願者を増加させることも期待されます。
- 10) 「佐賀大学留学生センター紀要」を年次ごとに発行し、研究論文を始め諸々の活動状況を報告していることは評価します。法人化以降、教員研究費が減少していますので、科研費を含めた競争的資金の獲得のために一層の努力と、合わせて教員の研究のさらなる進展を要望します。

以上